

平成28年度中古文学会春季大会記念展
文化装置としての『源氏物語』
— 九曜文庫を中心に —
修訂版



期間：2016年5月13日（金）
～5月28日（土）
※ただし5月15日（日）は閉室
時間：10:00～18:00
場所：早稲田大学26号館
大隈タワー10階
125記念室
主催：中古文学会
早稲田大学図書館
協力：早稲田大学文化推進
部文化企画課

※展示の際の展覧目録（紙媒体）は、印刷や紙数の制約があり、事実誤認も存在したため、文章に最小限の修正増補を施し、図像を拡大・カラー化した。そのため、レイアウト・ページ割りも変更されている。また、作品名に[早稲田大学図書館・古典籍総合データベース](#)上の各作品のリンクを貼った。2017年1月10日記。

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 文化装置としての『源氏物語』—九曜文庫を中心に— | 1 |
| 1.注釈された『源氏物語』 | 4 |
| 2.書写・刊行された『源氏物語』 | 15 |
| 3.補作された『源氏物語』 | 22 |
| 4.梗概化・翻訳された『源氏物語』 | 25 |
| 5.描かれた『源氏物語』 | 32 |
| 6.ずらされていく『源氏物語』 | 38 |
| 7.『源氏物語』という文化 | 48 |

解説執筆担当

| | |
|-----------|---------------------|
| 幾浦 裕之 | 1,12,20,21,22,24,49 |
| 伊藤 卓斗 | 7,11,13 |
| 柿寄理恵子 | 32,33,37,38,39,40 |
| 箆尾 知佳 | 42,44,45,46,48 |
| 川村 卓也 | 56,57,58,59,70 |
| 鈴木 晶子 | 43,47,61 |
| 滝澤 みか | 50,51,52,63,64 |
| 常田 慎子 | 3,5,6,14,15 |
| 富澤 祥子 | 41,62,65,66,67,69 |
| 新美 哲彦 | 53,60,68 |
| 西村亜希子 | 4,8,9,23 |
| ノット・ジェフリー | 2,10,16,17,28,29 |
| 平田彩奈恵 | 54,55 |
| 山崎 薫 | 18,19,30,31 |
| 楊 卓婧 | 25,26,27,34,35,36 |

※1 ページの説明、及び各セクション冒頭の説明は新美哲彦が担当し、全体の統一も行った。なお、展示品の展示箇所とパンフレットの掲載箇所は異なることも多いことをお断りしておく。

主要参考文献：中野幸一氏『源氏物語の享受資料—調査と発掘—』武蔵野書院

九曜文庫（文庫 30）について

九曜文庫はもともと源氏物語研究で大きな成果をあげている中野幸一先生（早稲田大学名誉教授）が個人で蒐集された膨大なコレクションですが、そのうち源氏物語を中心とした資料が、先生のご厚意により早稲田大学図書館の所蔵となりました。

文化装置としての『源氏物語』—九曜文庫を中心に—

『源氏物語』は、成立から現在までの千年間、いろいろな装置として働いてきた。たとえば婦女子の教育書として、和歌・連歌作成の必携書として、多種多様な場面における教育装置として。たとえば権力者に権威を付与する政治的装置として。たとえば女性カタログ、あるいは男性カタログのような形での発情装置として。「平安」なるものを知るための文化装置として。

1 三条西家旧蔵源氏物語は、いわゆる嫁入り本だが、三条西家旧蔵で外箱に「^(欠損)□光院御筆 源氏物語」との貼紙と、公時から実枝に至る系図と実枝の略歴が記されることから、三条西実枝（三光院 1511-79）筆との伝承を持つ。しかし表紙裏反古から実枝没後の作成と知られ、さらには解題で触れるように職業書写者の筆かと判断される。職業書写者の筆による、実枝没後の写本が、なぜ実枝筆『源氏物語』として三条西家に伝わってきたかは定かでないが、『源氏物語』注釈書である『山水』著者であり、細川幽齋に古今伝授を行った三条西実枝筆とすることで、当該写本の価値や権威が向上することは疑う余地がない。

つまり「実枝」は、当該『源氏物語』写本に権威を付与する装置として機能し、その「実枝」の権威を担保するものは、『源氏物語』講釈などの実枝の古典学者としての活動である、という入り組んだ形で、『源氏物語』と「実枝」は相互に影響し合っているわけである。

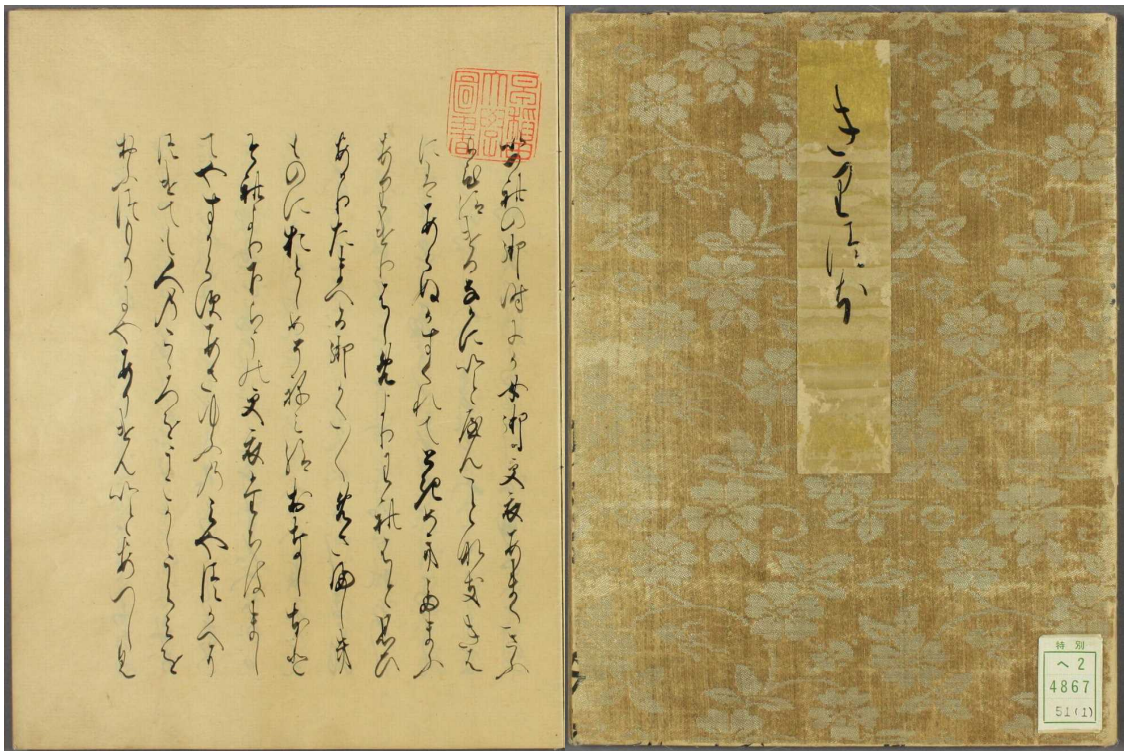
2 伝住吉如慶画・源氏物語扇面画帖は、扇面は住吉如慶(1599-1670)画、詞書は池田光政(1609-82)書とされる。扇面画は、絵画史上一つのジャンルを形成しているが、特に室町から近世にかけて、屏風などに貼り付けられることが流行した。『源氏物語』も扇面画として描かれることも多い。住吉如慶は、土佐派に学んだ住吉派の祖。池田光政は江戸初期の三名君のうちの一人で、さまざまな古典籍を書写したことで知られる文人大名でもある。このような人々が『源氏物語』の文化の一端を担っているわけである。

このように、どの時代においても、多様な文化を生み出す文化装置として機能してきた『源氏物語』のさまざまな側面を、この展示では、九曜文庫（文庫 30）の『源氏物語』関連の諸作品を中心に見ていく。

なお、便宜上、テーマごとにセクションを分けたが、たとえば『首書源氏物語』や『湖月抄』は注釈としても見逃せないし、『絵入源氏物語』などの版本挿絵や『修紫田舎源氏』由来の源氏絵は、描かれた『源氏物語』の重要な部分を成す。それぞれのセクションがテーマを越えて流動する様を想像していただきたい。

また、今回の展示は近世までの典籍を主要な対象とするが、能、歌舞伎などの舞台芸術、あるいは近代以降の現代語訳、外国語訳、マンガ化、映画化などに対象を拡げれば、さらに文化装置としての『源氏物語』が浮かび上がってこよう。

1 三条西家旧蔵源氏物語



列帖装 54 冊 縦 24.3 × 横 18 cm へ 2 4867 51

江戸前期写。金茶地桜花文緞子表紙。金泥雲霞引き題簽を中央に付す。見返しは金箔。前遊紙一丁。斐紙。一面十行。全帖一筆書。本文は巻によって河内本に近い三条西家本。菊花文様蒔絵小箆筒に収められた三条西家旧蔵の豪華な嫁入り本である。多数の書肆書留の反故、写本断簡が表紙裏に含まれ、当時販売された奈良絵本や高級写本の作品名と製本の分業を伝えている。書肆書留は十七世紀の京都蛸薬師通りにあった表紙屋弥兵衛から出たものと判断され、三条西家が職業書写者に依頼して製作させたものと考えられる。展示箇所は、表紙裏に挟まれた当該写本作成時と思われる写本断簡（紅葉賀表紙裏反故）と当該写本の当該箇所（橋姫）。比較的きちんとした書写だが、字母や一行字数がずれる箇所も見られ、厳密ではない書写と知られる。（参考：新美哲彦「近世前期の写本製作」国語国文 72-7）

2 伝住吉如慶画・源氏物語扇面画帖



折帖 1帖 縦 21.8
×横 28.3 cm 文
庫 30 B426

江戸初期写。極札は住吉如慶画、備前岡山藩主池田光政書とする。厚手の鳥の子紙全 109 面からなる大部な画帖。オモテ面の各見開きに物語卷々の一場面ずつを選び、左にその扇面図、右にその本文色紙を配置。画は上下に金泥の雲霞を引いた淡彩の墨絵で、色紙は模様の上に金銀の箔や泥を散らし、その筆致も流麗。なお、現在使用されていない裏面には、古筆切や極札などの剥離痕があり、古筆手鑑（もしくは外箱に書かれる「絵鑑」）を誂え直したか、あるいは裏面を古筆手鑑として使用していたかと思われる。展示箇所は桐壺巻で、光源氏元



服の場面。

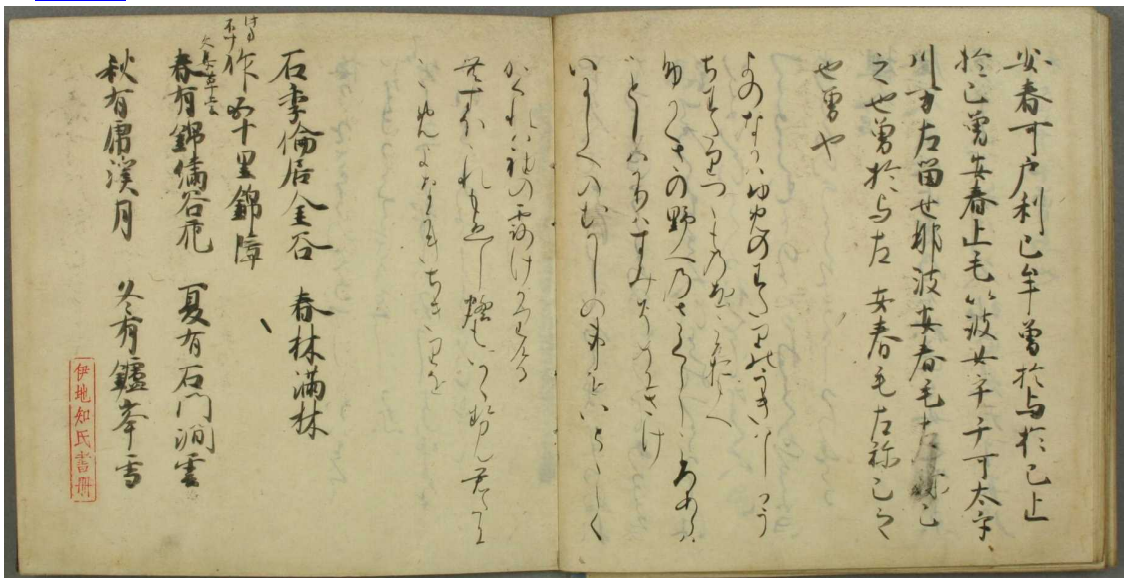
1.注釈された『源氏物語』

文学作品は、百年ほど経つと、意味の分からない箇所が出て来る。その時が、注釈が付されるか、作品自体が消えてしまうか、というその作品の分岐点である。これは今も昔も変わらないが、作り物語の地位の低かった当時、作り物語に注釈が付されるのは稀有のことであった。

成立時から、時の権力者・藤原道長の援助を受け、中宮彰子のもとで作成され、一条帝に読まれるという特別な存在であった『源氏物語』は、有名な藤原俊成の『六百番歌合』判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」に見られるように歌人の必携書となったこととも相俟って、仮名散文として初めて注釈が付される側となり、多くの注釈書が作成されていく。

しかしそれらのほとんどは、女性のための注釈書を作成した花屋玉栄が、過去の注釈書について、「さまざま人の知恵にまかせ編みたてたる物多し。され共いづれも我知恵才覚をあらはずばかりにて、耳遠き事多く、源氏のおもてはあらわれかねたる事共多し」（『花屋抄』跋文）と述べるごとく、男性による男性のための注釈書であり、『源氏物語』に権威を付与し、学習者に権威を付与する装置、男性の教育装置としての注釈書であるという点には留意しておかなければならないだろう。

3 うす雲



列帖装1冊 縦16.2×横15.9cm 文庫20398

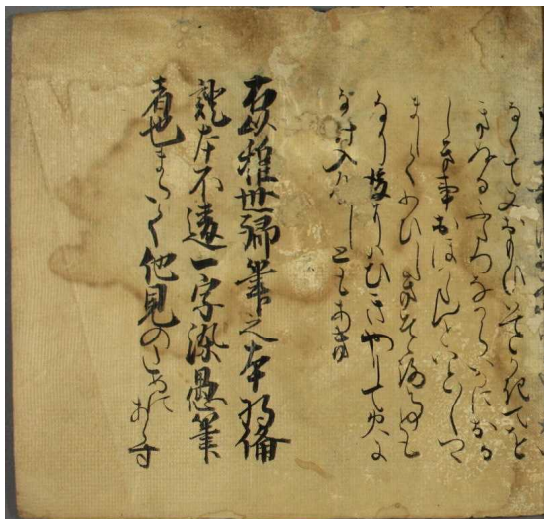
南北朝期写か。藤原定家(1162-1241)の注である『奥入』は、名前の通り、もとは『源氏物語』写本の奥(巻末)に定家が記した注で、その注部分を切り出して一冊にした定家自筆本『奥入』が現存し、それとは別の系統の『奥入』も二種存在する。

さらには、池田本や大島本のように、『源氏物語』写本巻末に付載される「奥入」も、少数ではあるが存在している。当該本は、巻末に「奥入」を付載する数少ない『源氏物語』写本のうちの一本。巻末「奥入」は本文同筆。大島本巻末「奥入」とは異なり、別冊形態の『奥入』に近い。異同は内閣文庫本系に近く、書写形態は自筆本系に近いという形を取る点、興味深い。伊地知鉄男旧蔵である。

4 弘安源氏論義

列帖装 1冊 縦 16.6 × 横 18.8 cm 文庫 30 A77

江戸初期写。弘安3年(1280)10月6日に行われた源氏物語の論議を、源具頭(1260?-87)がまとめた注釈書。議論は左右に分かれて行われ、左方は具頭・高倉範永・持明院長相・飛鳥井雅有、右方は藤原康能・楊梅兼行・藤原為方・藤原定成の八人が参加し、十六の難問が論じられた。故実先例出典などの考証を主とした鎌倉時代の研究傾向を示し、源氏物語注釈史上はじめて「准拠」の語が見える。表紙左肩に朱筆で書名が記される。飛鳥井雅世筆本への遡源可能性のある寛文元年六月中野市左衛門版本の奥書と同じ奥書を持つが本文は一致しない。なお、印より久曾神昇旧蔵本と知られる。



5 河海抄

袋綴 10冊 縦 27.1 × 横 19 cm 文庫 30 A80

江戸初期写。四辻善成(1326-1402)著。永和5年(1379)3月14日、散位基重、応永16年(1409)仲春、師阿の本奥書を有する。『河海抄』は、將軍足利義詮(1330-67)の命によって四辻善成が作成し献上したとされる『源氏物語』の注釈書である。現在伝わっている写本は、増補以前の本文をもつとされる中書本系統と、増補後の覆勘本系統に大別されるが、成立事情は複雑で、増補後にさらに手が増えられた本文もあったようである。本写本は中書本系統とみられるが、単純な誤写も散見される。基本的に、注記項目は仮名と漢字で、注記内容は片仮名と漢字で書かれる点、珍しい。文字の使い分けや改行などにより、視覚的に非常に整理されている。

四辻宮大納言家中出中書御本永和二年自
 益冬比今永和第五到季春四日書寫一筆訖
 永和五年三月十日 散位基重在判

康曆第二季春後八日重申出御本見合畢讀書
 雖非器依志切自基重家此一本所令相傳也
 應永第十自仲春比今到益冬比自書寫一筆訖
 不可出私箱也 師阿

此一句恥後見心畢

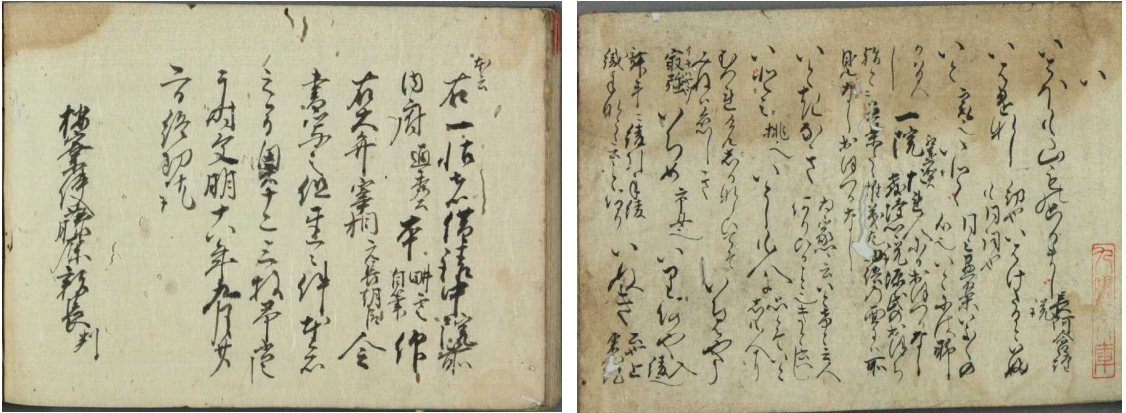
光源氏物語卷第一 桐壺卷

桐壺、泚景舍也此所曹司九二依テ光源氏ノ母御息所ヲ
 桐壺更衣ト云仍為卷名一名壺前裁詞二御前ノ壺前裁
 盛成ト有與入云或說此卷分與端有桐壺壺前裁ノ名云云
 是謬說也亦二卷二名也桐壺者正說壺前裁者異說也云云

川原院ノ某院鞍馬寺ノ北山ノ某寺ト云カカレ伊勢集始云
 何ノ御時カ有シ大御息所ト聞エケルト云 是等例御ノ字
 ヲハ何四ニテモ 既云ト云ヘシ 日本記以下ノ読祿也一説 既云
 也ヲホムノ假名共是是說也

女御更衣あまのりつりいけける中ノ 延喜ノ御時后妃多中ニ
 更衣周子ノ御腹ニ高明御子源氏ノ姓ヲ賜り給也 醍醐
 天皇後宮 未幾院相上皇 后太后宮藤原朝臣穗子 皇女 中宮藤原
 穗子 從二位 妃為子内親王 光孝天皇ノ女 贈從一位也 廿御 正三位源朝臣

6 仙原鈔



袋綴1冊 縦13.4×横20.6cm 文庫30A82

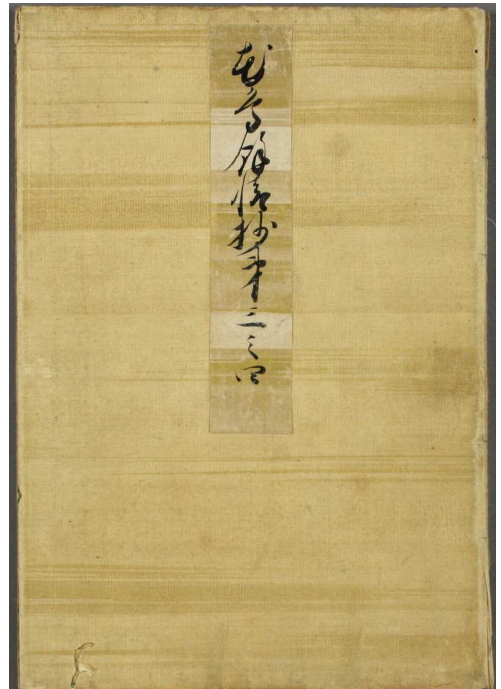
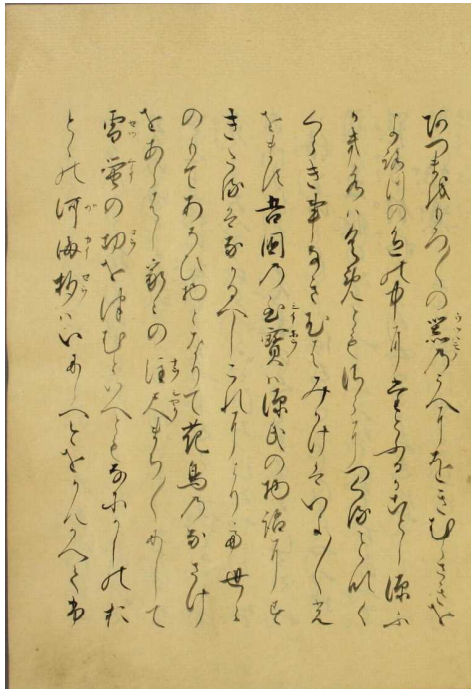
江戸初期写。長慶天皇(1343-94)著。書名は跋による。『仙源抄』は、南朝の長慶天皇が『源氏物語』の重要語句とその注記をいろは順に掲出し、一冊にまとめた注釈書である。同時代には珍しく、語句による検索ができるという点で、画期的な注釈形式であったといえる。注記内容には『水原抄』『紫明抄』『原中最秘抄』などの注釈書を利用し、本文は定家自筆本と比較し校合したという。耕雲山人(花山院長親(1346?-1429))筆本(中院通秀(1428-94)蔵本)を、息子の甘露寺元長(1457-1527)の依頼によって文明18年(1486)に写したとの甘露寺親長(1424-1500)の本奥書をもつ。横本で、小口上部に朱でインデックスを付しており、実用的な本として作成されているが、その割には状態がよい。

7 花鳥余情

列帖装 15冊 縦 23.5 × 横 16.7 cm 文庫 30 A155

江戸前期写。一条兼良(1402-81)著。題簽「花鳥餘情抄」。秋草図金蒔絵箱入。外箱裏に「一条兼長卿御筆」との記載がある。巻末には成立事情を誌した文明4年(1472)の一条兼良の本奥書のみ。兼良が応仁の乱を避け疎開地である奈良で著わした三十卷から成る『源氏物語』の注釈書。序文より、『河海抄』の不備を補い、誤りを正そうとしたものであると述べているものの、その方法は『河海抄』が詳細な出典考証により注を付したのに対し、『花鳥余情』は文意・文脈を明らかにすることに主眼を置いており、

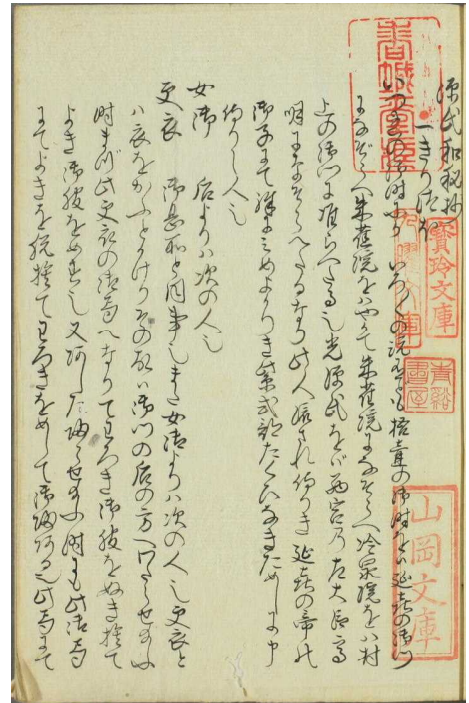
両者の注対する態度は異なる。『花鳥余情』以前を以て『源氏物語』研究に大きな影響を与えた。きれいな嫁入り本



のような体裁で、読まれた形跡もさほどない。有名な注釈書の地位の変化（読む／学習するための書から、飾る／所有する書へ）が窺われよう。

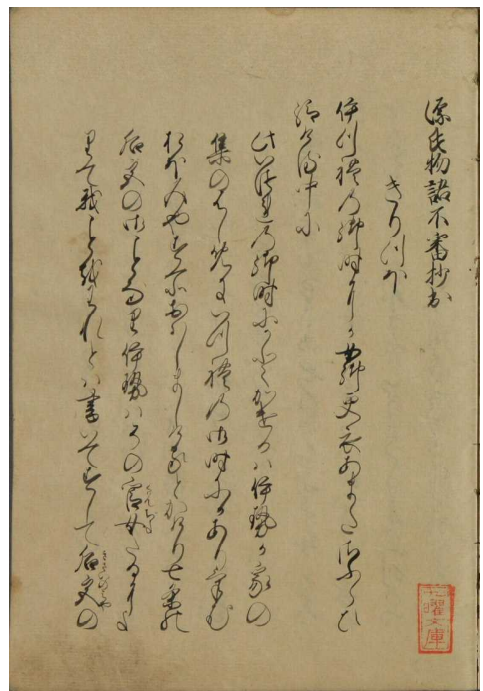
8 源氏和秘抄

袋綴1冊 縦22.7×横16.5cm 文庫30 A85
安永2年(1774)明阿弥陀仏(山岡浚明(1726-80))
写。宝徳元年(1449)成立の一条兼良による注
釈書。『源氏物語』から約900語句を取り出し、
初心者向けに簡単な解釈を施す。先行注釈のよ
うな漢字漢文による解釈ではなく、和語による
解釈方法を取っており、考証学風から文意文脈
を解釈する学風へ向かう先駆的意味を持つ。本
書は山岡文庫・青谿書屋・寶玲文庫・春城堂蔵
・九曜文庫の蔵書印を有し、山岡浚明が書写を
し、その後、『源氏物語』大島本の旧蔵者大島
雅太郎(1868-1948)、英国人日本研究家フラン
ク・ホーレー(1906-61)、中野幸一(1932-)の
手を経たと知られ、伝来の点でも注目される。



9 源氏物語不審抄出

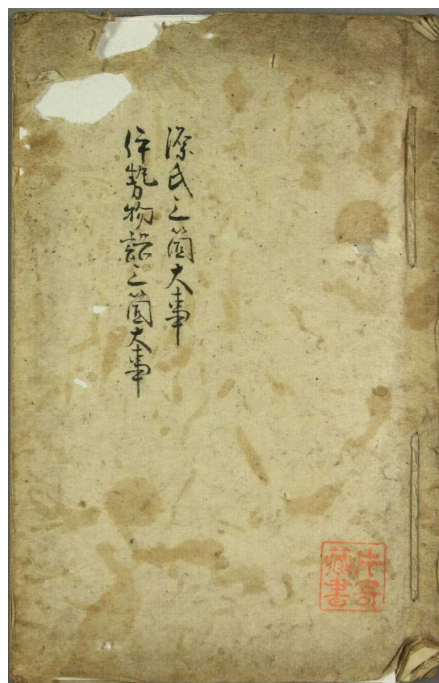
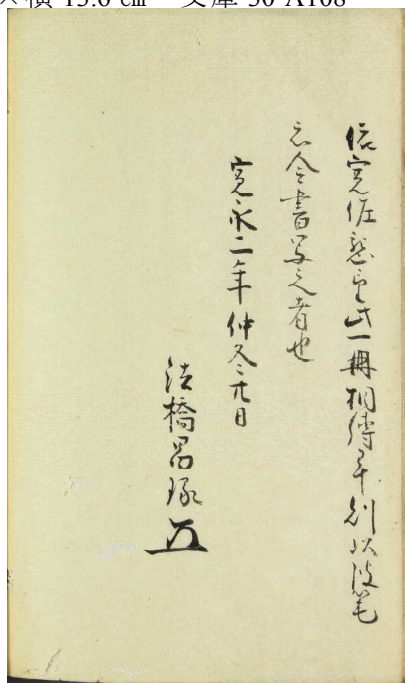
列帖装1冊 縦23.7×横16.9cm 文庫30 A114
江戸前期写。宗祇(1421-1502)による注釈書。『源
氏物語』から解釈上問題のある箇所を120項目
余り抄出し、語句・文意・文脈などを詳細に
解説する。『河海抄』や、師である一条兼良の
注釈『花鳥余情』等の先行注釈を批判的に引
用する。現存諸本には富小路俊通(?-1513)に
よる奥書があり、宗祇が関東下向直前にこれ
を託した旨が記されている。本書は、7『花鳥
余情』同様、きれいな江戸前期の写本で、振り
仮名も施されているが、俊通奥書本の中でも
比較的脱落や誤写の少ない本とされている。
なお、俊通奥書を持たず、草稿段階と考えら
れるものも一本確認されており、その異同か
ら形成過程を知ることができる。



10 源氏三箇大事・伊勢物語三箇大事

仮綴1冊 縦20.2×横13.6cm 文庫30 A108

江戸中期写。「源氏三箇大事」と「伊勢物語三箇大事」の合写。寛永2年(1625)の里村昌琢(1574-1636)から東井坊寛佐(1584-1642)への相伝奥書を花押を含めて写したものの。「三箇大事」とは「揚名介」「子のこの餅」「とのみ物の袋」の、『源氏物語』本文中特に難解と思われた三つの語句を指す。肝要な秘事も見なされた。本書は一条兼良『源語秘訣』を基

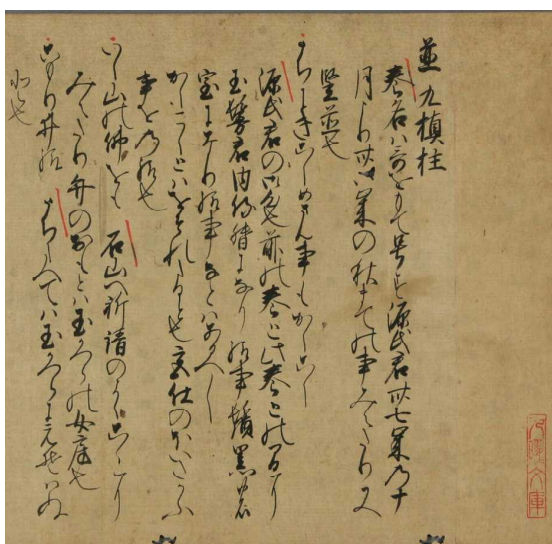


盤にしながら追加も多く、秘伝発展の一端が窺えることで貴重。戦国期の著名な連歌師・里村紹巴の子孫で後継者でもある昌琢が関わった本としても注目に値する。展示箇所は『源語秘訣』由来の本文や、語釈、音読、故実等多岐にわたる頭注が見られる。

11 一葉抄 楨柱

卷子1巻 縦23.7×横679.6cm 文庫30 A120

安土桃山写か。箱書は細川玄旨筆と極めるが、幽斎筆でよさそうである。藤原正存(生没年未詳)が著わした『源氏物語』の注釈書『一葉抄』の一部。宗祇・肖柏の説を基本とし先行諸注を集成したもので、後の三条西実隆(1455-1537)による注釈書『弄花抄』と近接した傾向を持っている。細川幽斎(1534-1610)は、三条西実枝から古今伝授を受けた歌人、歌学者として知られた。『一葉抄』の伝本も多くは十冊本の形をとっており、本書も



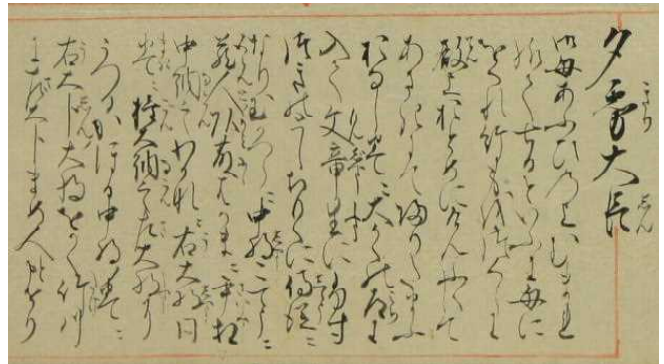
もとは同様の形態を有していたと考えられるが、後人が幽斎の墨跡を尊重し、その一部を卷子装に改めたかと考えられる。

1 2 源氏物語系図

卷子 1 巻 縦 26.7 × 横 479.7 cm

文庫 30 A61

江戸初期写。『源氏物語』の登場人物を皇統、家系によって整理し系統化したもので、三条西実隆の整理以前の「古系図」は鎌倉時代の『源氏物語』の実態を知る重要資料である。本系図は横川僧都の妹尼を「安養尼」と表記する古系図のひとつ。横川僧都は源信(942～1017)がモデルであるという解釈が『河海抄』などに見られ、妹尼は源信の妹で『続本朝往生伝』にも載る安養尼(願証)に擬えたか。(参考：常磐井和子「安養尼本源氏物語古系図」(紫式部学会編『源氏物語



枕草子研究と資料』武蔵野書院) 総所載人数は 216 名と多めで、正嘉本などに近く、系図が増補拡大されていったことを示す。箱書と貼紙に烏丸光広(1579～1638)筆と極めるが真筆とするには筆勢が乏しいか。掲出箇所は最終官職名が研究上問題の「夕霧」の項目。人物伝の「かほる中将巻」とは「匂兵部卿巻」の鎌倉時代の別名である。

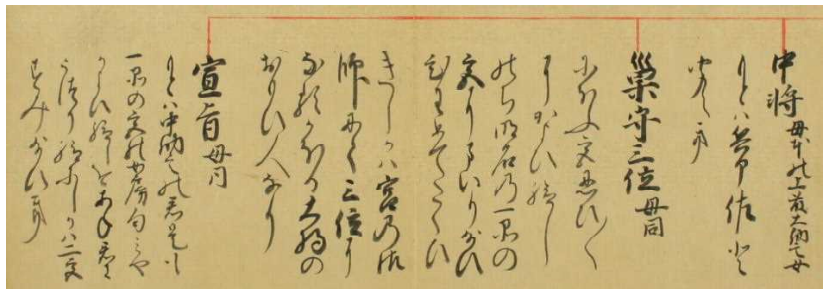
1 3 源氏系図

折本 1 帖 縦 27.5 ×

横 11.9 cm 文庫 30

A62

江戸中期写。三条西実隆整理以前の「古系図」の一本。冒頭に「源氏のおこり」

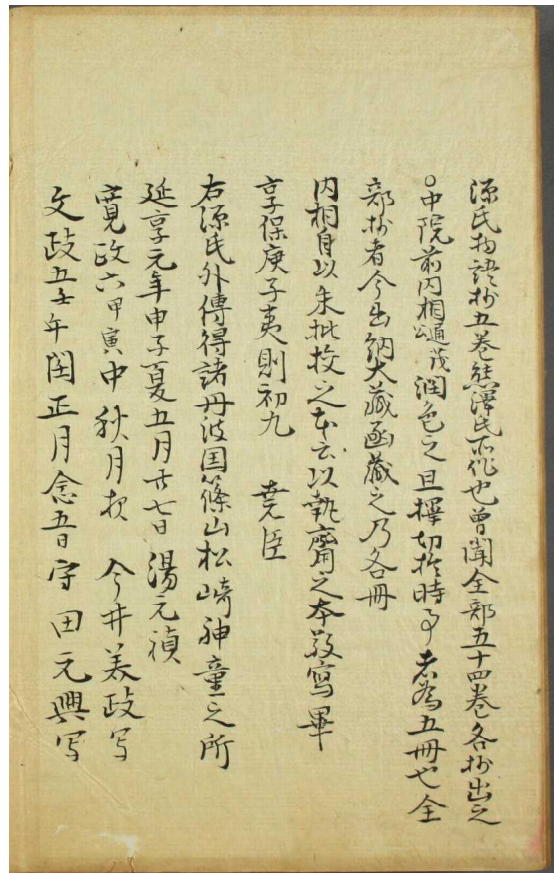


を有する。本系図には現存の物語に登場しない「源三位」「中将」「巢守三位」「宣旨」なる人物が記されている。巢守三位は高野山正智院旧蔵『白造紙』に「スモリ」とあるのをはじめとし、古系図などの他文献にもその名が見られることから、かつて『源氏物語』の中の一巻、または独立した物語として巢守三位を中心とした話が存在したと知られる。巢守三位は蛸宮の孫、匂宮と薫の二人から求愛される麗人で琵琶の名手。のち薫と結ばれて若君を生むが、匂宮の強引な求愛に世を厭い出家するという。

1 4 源氏外伝

袋綴 1 冊 縦 24.3 × 横 16.3 cm 文庫 30 A121

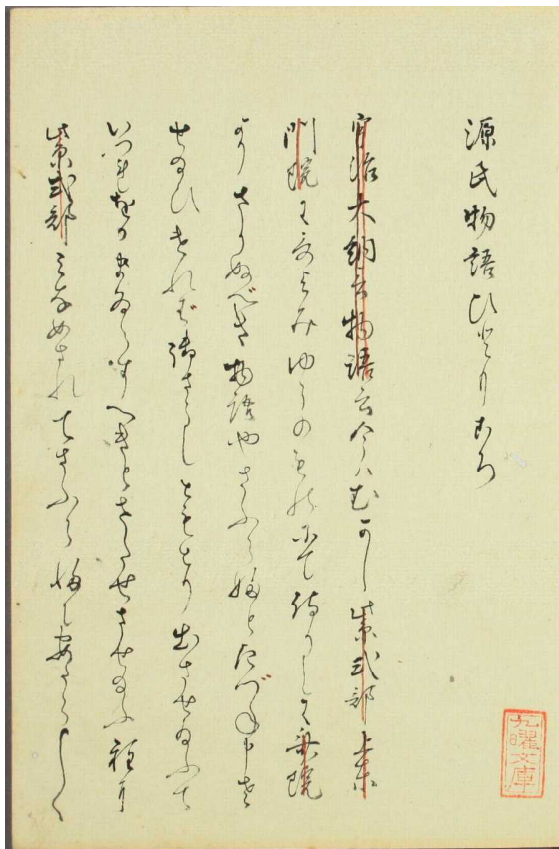
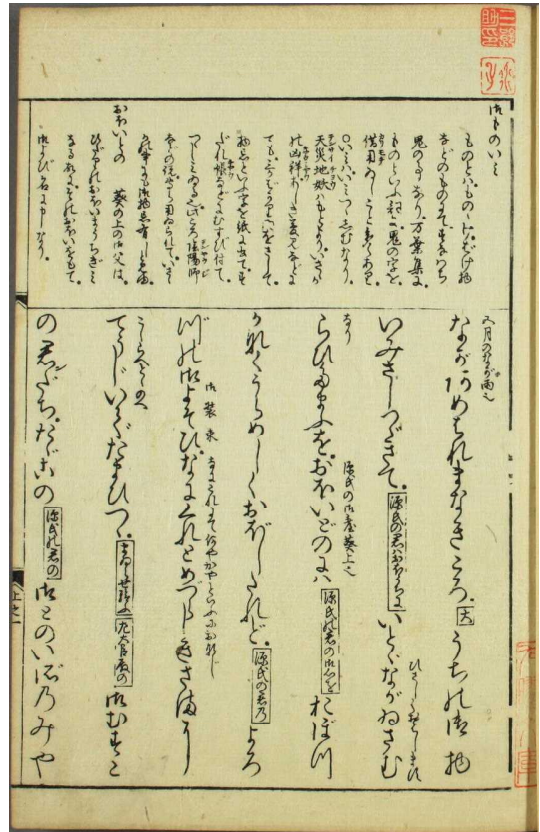
文政 5 年 (1822) 守田元興写。『源氏外伝』は、儒学者であった熊沢蕃山 (1619-91) が、儒教の立場から『源氏物語』に対する解釈を示した注釈書である。奥書によると、もともと 54 帖すべてに対して解釈を記したようだが、現在伝わっている写本はいずれも中院通茂が整理し直したもので、4 冊に編集したものが流布したようである。ただし、4 冊の形態で残る写本は稀であり、本写本も 1 冊である。内容は「桐壺」巻から「藤裏葉」巻までであるが、「須磨」「明石」両巻は「藤裏葉」巻に続いて再度扱われる。享保 5 年 (堯臣)、延享元年 (湯元禎)、寛政 6 年 (今井美政) の本奥書を有する。堯臣は松崎観瀾 (1682-1753)、篠山藩家老。湯元禎は、『常山紀談』で有名な湯浅常山 (1708-81)、岡山藩士。学の伝播を知る上でも興味深い。



15 雨夜物語だみことば

袋綴 2冊 縦 25.8 × 横 18 cm 文庫 30 A149

安永 6 年 (1777) 刊。『雨夜物語だみことば』は、加藤美樹 (1721-77) が「帚木」巻の雨夜品定め本文とその注記を記したものである。明和 6 年 (1769) の自序に加え、美樹と親交のあった上田秋成の安永四年 (1775) の序をもつ。頭注と行間注だけでなく、本文中に枠囲いで動作主体や場所などの状況説明が補われており、本文を目で追うだけでも内容が理解できるように工夫が施されている。頭注には多く賀茂真淵の『源氏物語新釈』が用いられている。



16 源氏物語ひとりごち

袋綴 1冊 縦 23.6 × 横 16.9 cm 文庫 30 A195

文化 5 年 (1808) 源宗悟写。全冊に朱線・朱引。江戸期故実学の大家・伊勢貞丈 (1717-84) がその『源氏物語』に対する様々な見解を述べた書。安永 10 年 (1781) 成立。石山寺起筆説、紫式部観音化身説などの古伝を懐疑的に捉え、物語の成立時代からその言葉や方法などを考察して、儒教色の強い考証学的立場から『源氏物語』を再評価する。ここに見えるのは従来の紫式部鬼才説を否定してその書く力量を作者自身の「文学」に求めた独自の主張。

なお、『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』2621『故実雑書』内に「元日うしの

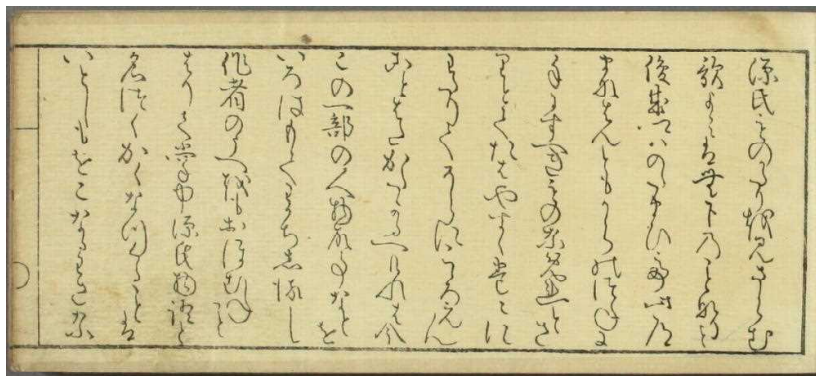
始詳ならず」(文化 5 年(1808)源宗悟)とあり、前後に伊勢貞丈の著作が並ぶことから、この時期、源宗悟は集中的に伊勢貞丈の著作を書写していたか。

1 7 掌中源氏物語

袋綴 1 冊 縦 7.0 × 横 16.7 cm 文庫 30 A244

天保 8 年 (1837) 刊。江戸中期の国学者・尾崎雅嘉(1755-1827)が初心者向けに編んだ『源氏物語』精読の手引き。寛政 9 年 (1797) 成立。「卷々にわたりてそらにこゝろえんことはたかたかるへければ」、簡略な総論(「紫式部伝」「物語趣意」等)と年譜(光源氏・薫)

に続いて、本書の大半を占めるいろは順の索引二種、「五十四帖人物一覧」と「五十四帖故事一覧」を提供する。展示箇所は後者からの一丁で「手習の君出家の事アマヨシノチサダメ」「雨夜品定の事アメヨシノチサダメ」「葵上ものアオイノミ」の事ハキ」等々。片寄正義旧蔵。



2.書写・刊行された『源氏物語』

『紫式部日記』に、『源氏物語』かと思われる物語の清書作業が描かれるごとく、文学作品の流布と書写は切り離せない。書写による流布しか期待できなかった近世以前、『更級日記』や『明月記』、あるいは鎌倉期の写本の残存状況を見てもわかるように、『源氏物語』のように大部な作品を入手することは非常に困難であった。室町期に入ると、文化や権威を欲した大名たちによって、美しい写本が作成・購入されるようになる一方、注、異本注記などを書き込んだ学習用の写本も見られる。

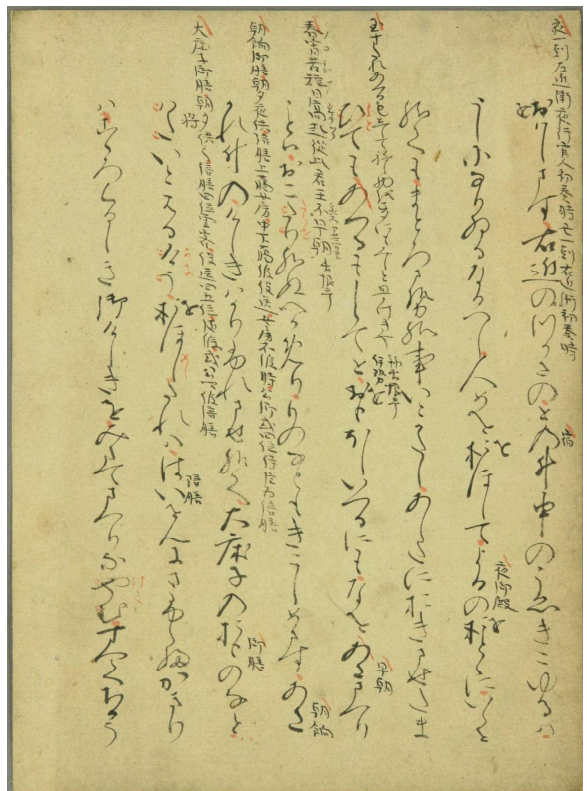
近世に入り、版本が商業ベースに乗るようになると、さまざまな古典作品が刊行されるようになる。『源氏物語』も古活字版を経た後、17世紀中頃以降、『絵入源氏物語』、『首書源氏物語』、『湖月抄』と、明治以降まで増刷され、読まれることになる本文が提供されるようになる。

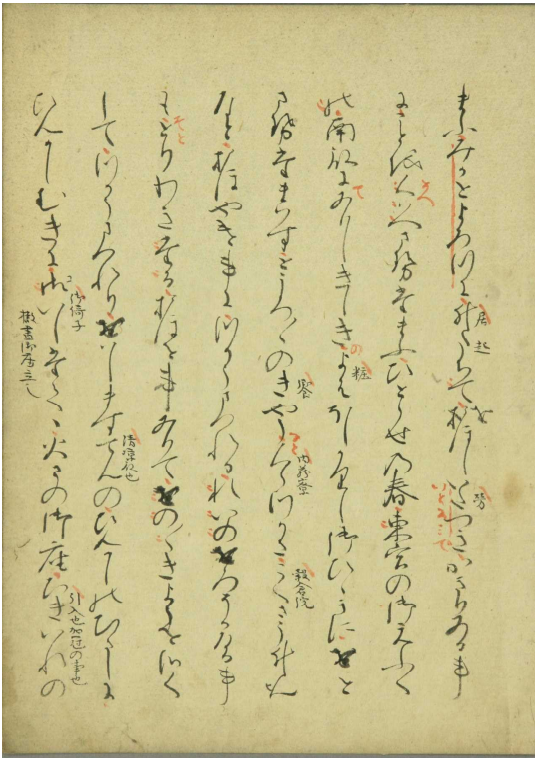
一方、室町末から近世にかけて、茶の湯の流行から茶掛けの書の需要が高まり、古筆切が市場に出回るようになる。このような古筆切も一つの文化装置と言えよう。

18 伝一条兼良筆源氏物語桐壺卷断簡

1葉 縦26×横19cm へ125092

加賀前田家旧蔵との伝承を有する（『思文閣墨蹟資料目録別冊21号』（2000年3月）175所掲）。裏面に「一條殿兼良云」の古筆本家の極札が付属する。また、裏面右中央には「かねよし」と直書き、右下には、貼紙に「六十二番 兼良云二十九枚ノ内」とある。一条兼良は、室町時代の公卿・学者で、『花鳥余情』などの源氏物語注釈を著した。当該切の本文は、桐壺更衣を亡くした桐壺帝の悲嘆の様子を描く場面である。朱筆で句読点・合点が付され、墨筆で注が加えられている。本文は河内本系であるが、定家本系の本文で校合がなされている。また、定家仮名遣いに拠ったものか、本文中のいくつかの「お」の字は、「を」の字に訂正されている。（参考：兼築信行氏「早稲田大学図書館所蔵の古筆切資料」『早稲田大学図書館紀要』第48号）





19 伝一条兼良筆源氏物語桐壺卷断簡

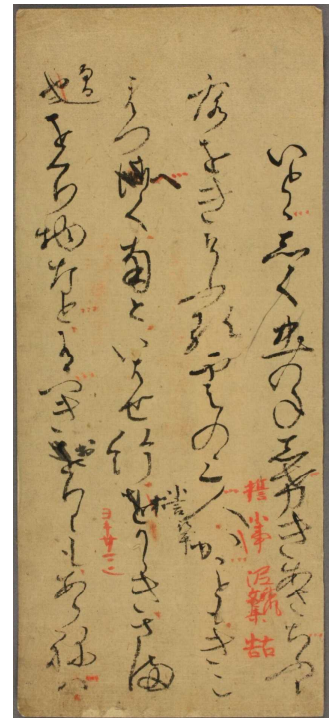
1 葉 縦 26 × 横 18.8 cm へ 12 5093

展示品 18 の連れ。裏面に「聞兼良」の札が付属する。また、裏面中央には、「一條兼良」と直書き。当該切の本文は、光源氏の元服の儀を描く場面である。朱筆で句読点・合点が付され、墨筆で注が加えられている。本文は河内本系であるが、展示品 18 と同様、定家本系の本文で校合されている。例えば、一行目は特に両系統間の異同が大きい部分であり、「帝よろづに居起ちて思しいたつき」という本文が、「居起ち思し営みて」と朱訂されている。また、定家仮名遣いに拠ったものか、本文中のいくつかの「お」の字は、「を」の字に訂正されている。

20 今川了俊筆源氏物語桐壺卷断簡

1 葉 縦 26.7 × 横 11.5 cm へ 12 5110

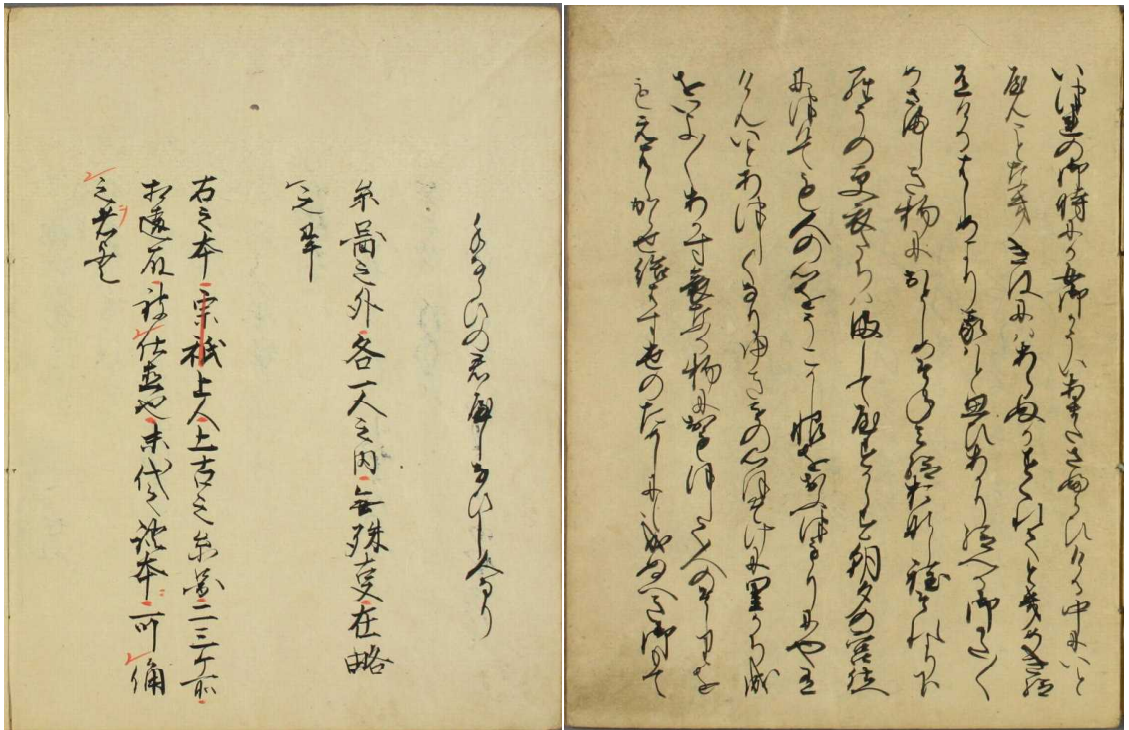
楮紙。裏面に鑑定家古筆了珉の極札が付属し「甲戌四」(1694年4月)の書き入れ。今川了俊(1326?-1420?)筆の『源氏物語』断簡は、伊予切と呼ばれており、他に空蝉卷一卷と夕顔卷の断簡が伝存。桐壺卷は現在この一葉のみ確認される。当該切の本文は桐壺更衣の母が帝からの弔問に謝し、歌を詠む場面である。朱筆で句読点と三点濁点を付し、注を加える。「愚老が歌の心付たるは源氏を三反被見して後より風情も心も出来し也(『了俊一子伝』)」と述べた晩年の武家歌人了俊の『源氏物語』享受の様子が窺える。(参考：前掲兼築氏論)



2 1 源氏物語

列帖装 55 冊 縦 22.5 × 横 18 cm 文庫 30 A2

室町後期写。薄茶色斐紙無地表紙。12.4 × 3.3 cm の布目紙に金泥雲霞引き題簽を中央に付す。本文と同筆の源氏系図が附属。見返し本文共紙。斐紙。一面九行、字高 19.5 cm。全帖一筆。各帖末に墨付丁数を記す。収める桐箱かぶせ蓋中央に「花山院筆／

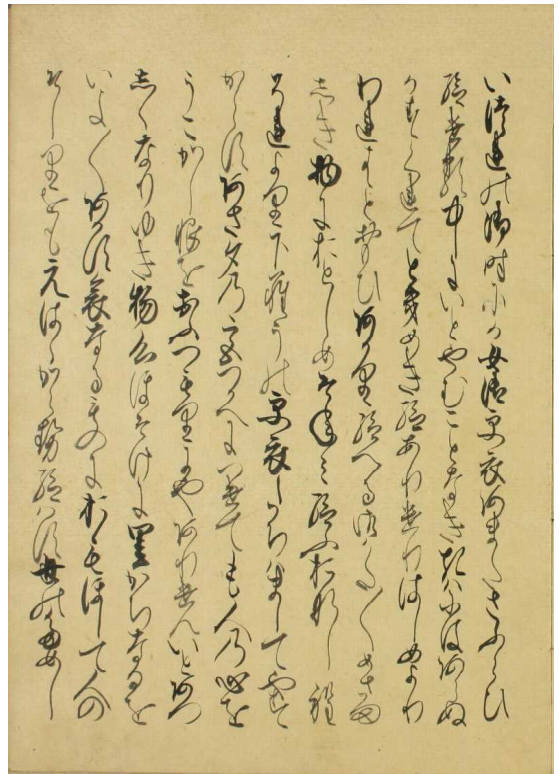
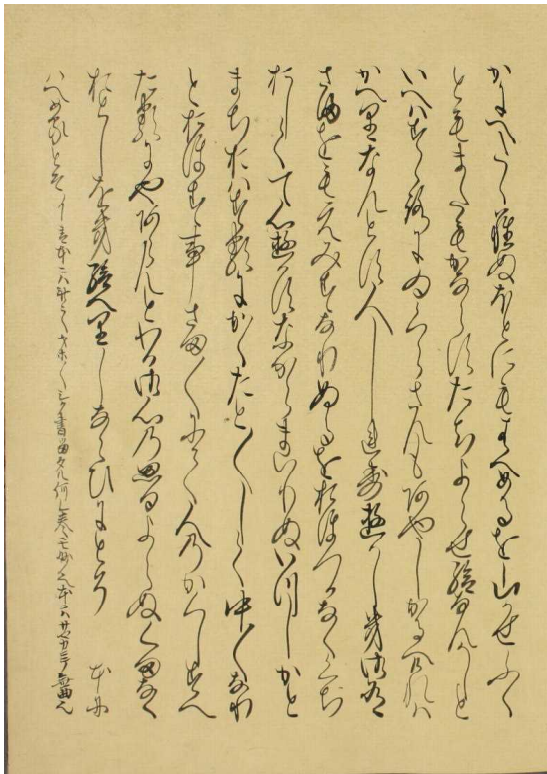


源氏 一部五十四」と直書し、右下に「第貳百九拾八号」、左上に「智」、右上に剥離跡、側面に「五九」と書した票を貼付。本文は所謂青表紙本の系統。野村八良旧蔵本。附属の系図に「右之本宗祇上人上古之系圖二三ヶ所／相違故被仕直也未代之證本可備／之者歟」と、源氏物語系図の伝来に宗祇が関与したとの識語がある。

2 2 源氏物語

列帖装 54 冊 縦 25.0 × 横 18.5 cm 文庫 30 A3

江戸初期写。切揉箔散らし紺紙金泥草花下絵表紙。11.7 × 2.8 cm の緋色題簽を中央に付す。見返しは金箔に網代地桐文様押し。本文料紙は礬砂引きの斐紙。前遊紙一丁。一面十一行、字高 21.4 cm。巻名を金泥で側面に配した漆塗箱に収められる豪華な嫁入り本である。さらに桐箱がふたつ附属し、ひとつに「南山和尚遺物／源氏五十四帖」と直書される。伝来に関わったという南山和尚とは、或は仙台瑞鳳寺住持の臨濟宗の僧で詩文も為した南山古梁（1753 ～ 1839）のことか。夢浮橋が「ならひにとそ」と本文が終わり細字で「本にはへめるとそイ」と書かれるのは、日本

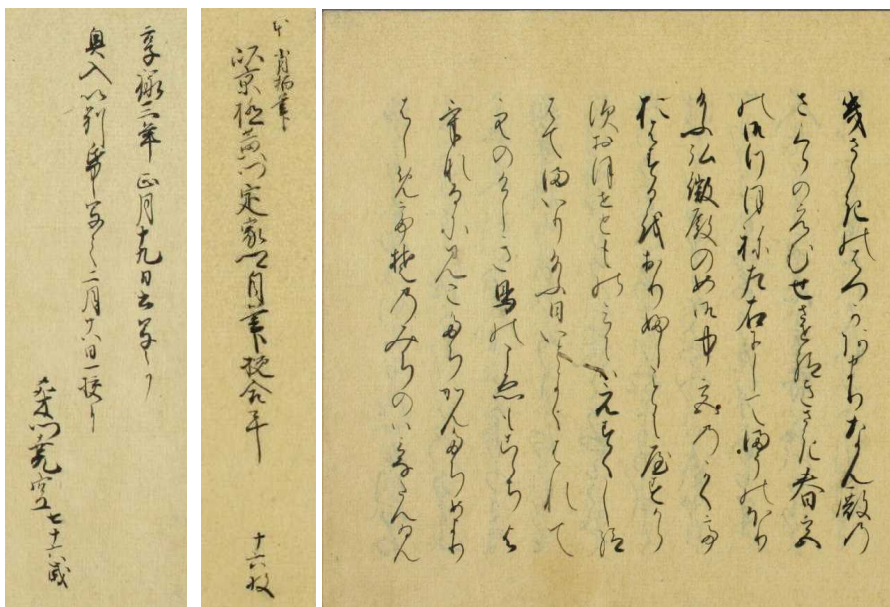


大学所蔵三条西家証本が「本にはへめるイ」とあるのに近く、当該本はさらに巻末表現に対する注記が続く。

23 花の宴

列帖装 1冊 縦
16.9 × 横 17.1 cm

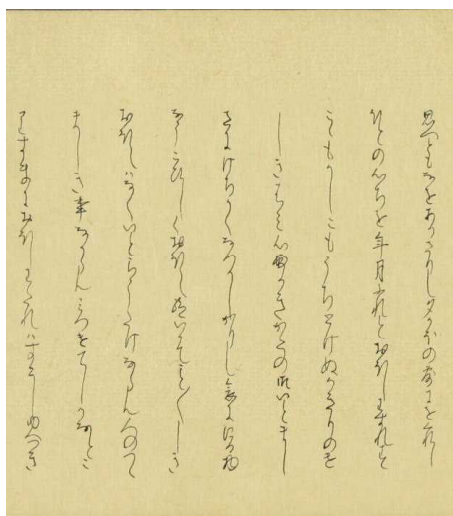
文庫 30 A13
江戸後期写。信
夫に三つ組み桐
文の紙表紙。見
返しは菊花ぼか
し刷に金箔ちら
し。三条西実隆
による享禄3年
の本奥書が日本
大学蔵三条西家
証本の書写奥書
と一致する。ま
た、日大本と字
詰めをほぼ同じ
くすることから



も、日大本の写しと知

られる。ただし、一面の字詰めはほぼ同じくするものの、漢字仮名の表記や字母は異なることも多い。また、冒頭部分はミセケチが反映されていないものの、基本的には親本の書き入れに従って整訂され、衍字訂正や補入を反映している。親本に異文注記が見られる箇所は、異文を本文として採用している。朱筆での本文への書き入れが二箇所あるが、親本との校合結果ではない。

参考出品：『日本大学蔵源氏物語』第2巻八木書店, 1994.11



24 袖珍本源氏物語

卷子 54巻 縦 8.7 cm 文庫 30
A325

江戸中期写。天地約 8.6 cm の極小
の卷子本。表紙は布目紙に草花
下絵を描いた斐紙。題簽は金砂
子を散らした薄紅色、軸は黒壇。
本文は極細筆で全巻を同筆、つ
まり一人の手で書写されている。

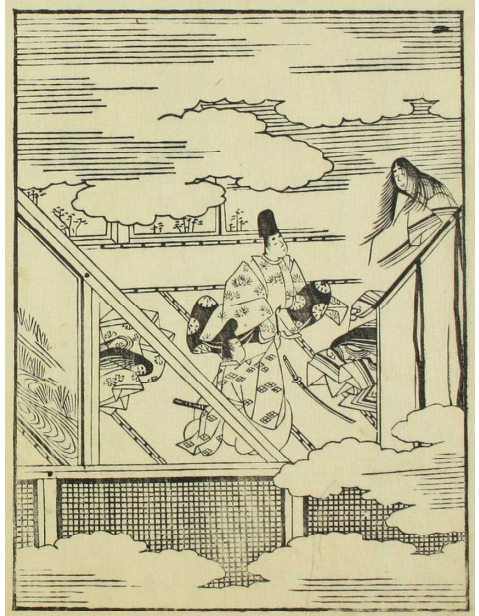
『源氏物語』が富貴な人々の嫁
入り道具とされたことは多いが、
当該本のような華麗な袖珍本は
他に類を見ない。物語作品の巻
子装という点でも珍しい。桐壺、
と本文が取り違えてあり、展示巻

末摘花、蓬生、常夏、夢浮橋の五巻で交互に題簽

は、題簽は「桐つほ」だが本文は末摘花である。

2 5 絵入源氏物語

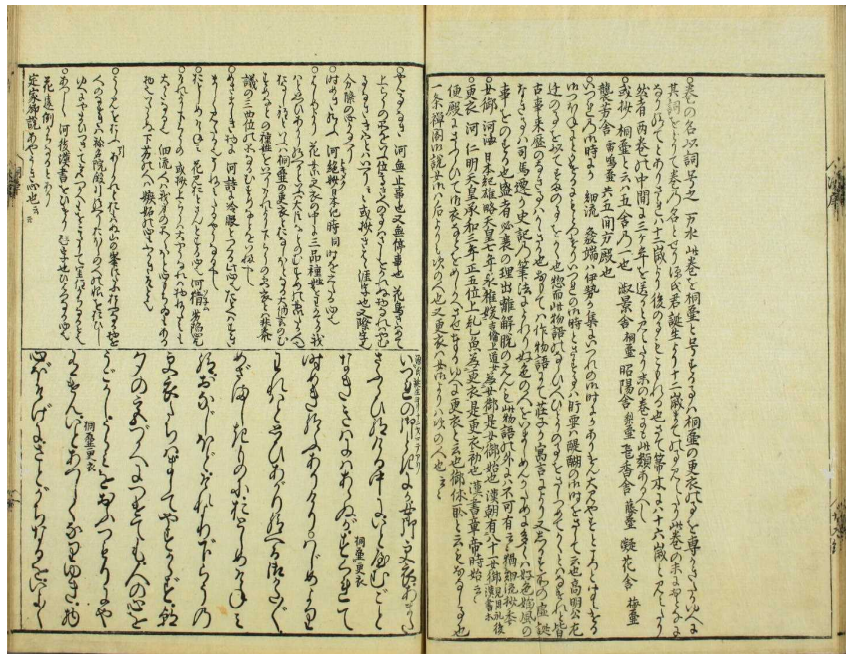
袋綴 60冊 縦 26.9 × 横 19.1 cm 文庫 30 A7
承応 3 年 (1654) 刊。山本春正 (1610-82) 編。
源氏物語 (54 冊 桐壺・夢浮橋) 山路の露 (1 冊)。
源氏目案 (3 冊 巻第 1-7) 源氏系図 (1 冊) 源氏
物語引歌 (1 冊) の全 60 冊。『絵入源氏物語』は
『源氏物語』をよりわかりやすくするために、
初めて濁点・句読点・振り仮名を加え、傍注に
は『花鳥余情』や『弄花抄』などの注を略記し、
主語や話者を指示した画期的な書物だった。さら
に、54 巻に 226 図の挿絵もある。初版は無
刊記で慶安 3, 4 年 (1650, 51) に出版、承応 3
年 (1654) の大本は再版で、後に万治 3 年 (1660)
横本と寛文頃の小本が出される。このうち最も
広流布したのは展示品の承応 3 年刊本であり、
庶民に源氏物語を普及した功績は大きい。



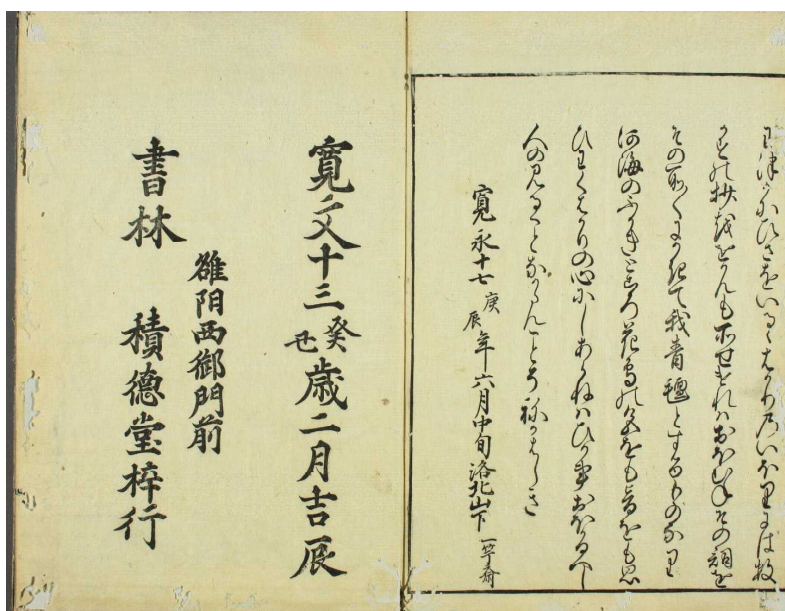
2 6 首書源氏物語

袋綴 55冊 縦 28 × 横 19.6 cm 文庫 30 A14
寛文 13 年 (1673) 刊。源氏物語 (54 冊)、系図 1 冊。寛永 17 年 (1640) 6 月跋。

著者一竿斎。注釈
および本文を含ん
だ、版本では初め
ての本格的な注釈
書である。『首書
源氏物語』は『源
氏物語』の本文を
全文掲載し、その
脇に傍注、その上
に頭注を書き込み
、解説を簡略に
加えるという形
式を採っている。
本文の系統は三
条西家などに近い
系統のもので、
以降、活字本と
してよく使



用された。注釈の内容は主に旧注の内容をまとめたものであり、『湖月抄』と比べるとかなり簡略なものになっている。著者一竿斎は北野社の一竿斎能貨（生没年未詳）。中院通茂（1631-1710）の講釈を受けており、その意味でも注目される。（参考：日下幸男氏「鍋島光茂の文事」『国語と国文学』65-10、同「後水尾院歌壇の源語注釈」『源氏物語古注釈の世界』汲古書院）

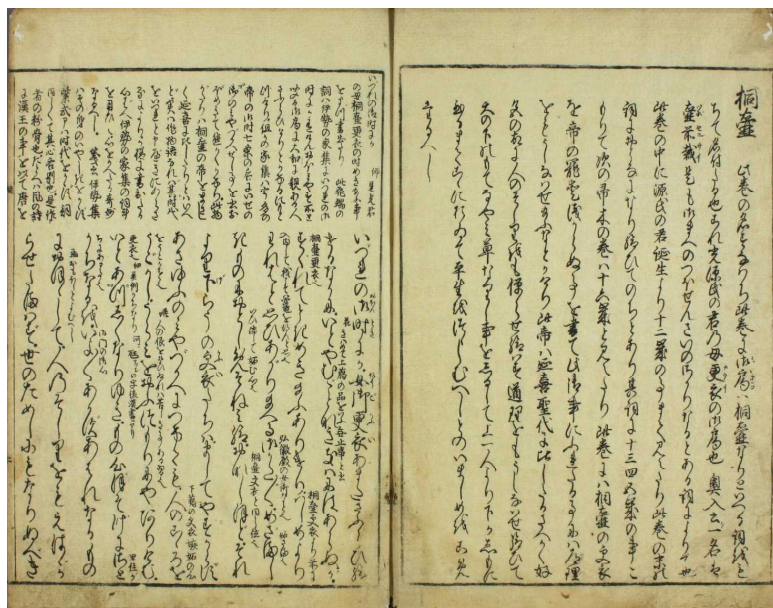


27 湖月抄

袋綴 60冊 縦 27.4 × 横 19.3 cm 文庫 30 A191

延宝元年（1673）刊。北村季吟（1624-1705）著。

『源氏物語』55冊（「若菜」上下と「雲隠」を共に数えるため）に、発端1冊、系図（文本）1冊、年立2冊、表白1冊の計60冊。書名は紫式部が石山寺に参籠し、八月十五夜の月が湖水に映ったことから物語の想を得たとする伝説による。『源氏物語』の全文を掲載し、



それに傍注・頭注の形で諸注を付している。旧注を要領よくまとめて読みやすくしており、『湖月抄』までの注釈書を「旧注」とし、これ以降の注釈書を「新注」と称した。『源氏物語』についての知識が無くても、この本を読めば、『源氏物語』が理解できるようになっている。江戸時代、最も読まれた『源氏物語』の注釈書である。

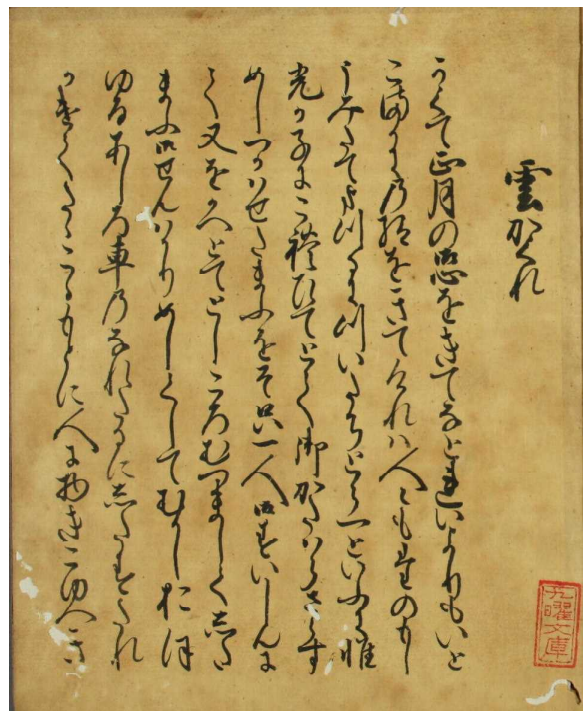
3.補作された『源氏物語』

『源氏物語』は現在、54帖で一つのまとまりとして読まれているが、いつから54帖になったのか、もともと54帖であったのかは定かではない。補作もいつから行われたのか、あるいは54帖内に補作があるのかもわからない。宇治十帖他作者説は、古くから現在に至るまであるし、『風葉和歌集』や「古系図」には、「巢守」関連の人物が、『源氏物語』の人物として記載される。影響力の強い作品ほど、補作やアダプテーションの欲求は強くなる。補作やアダプテーションを通じての『源氏物語』世界の深化・拡大もまた『源氏物語』文化の一端である。

28 雲がくれ

袋綴1冊 縦20.7×横18.1cm 文庫30 A54

江戸初期写。外題は「雲かくれ」とするが、中に光源氏の出家と死を語る「雲隠」と、薫・匂宮・浮舟等の後日譚をつづる「巢守」「桜人」「法の師」「雲雀子」「八橋」を含む『雲隠六帖』。江戸期諸版本と内容を異にして写本にのみ伝わる別本系統の一伝本。本系統数本に伝わる識語から、その成立が室町後期に遡ると確認され、古体により近いと思われる。展示箇所は光源氏の出家生活十三年、忘れきれない故紫の上への最後の墓参りが語られる場面。左端の歌の下句は「…雲かくれよとおほええぬかな」と帖名を読み込む。



29 源氏雲隠抄

袋綴9冊 縦27.5×横19cm 文庫30 A58

寛文10年(1670)以前刊。浅井了意(1612?-91)著。流布版本系『雲隠六帖』六冊(外題「雲かくれ」等帖名のみ)と、その注釈となる『源氏雲隠抄』三冊(外題「源氏抄」)からなる。年代や著者を本から特定できず、仮名草子や啓蒙書を多く著し

た浅井了意の作とした寛文10年刊の書籍目録に従う。現存伝本は上方版系と後に成立した江戸版系に大別され、同じ本文ながら、挿絵、体裁等、大きく異なる。本書は上方版の中でも一番早い九冊無刊記本の一つ。展示箇所は展示品28と同じ「雲隠」の場面。



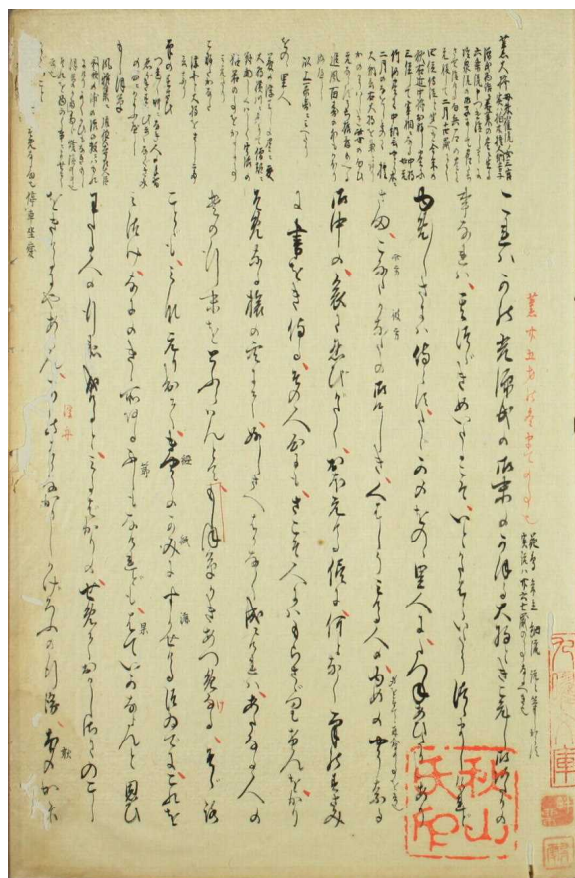
30 山路の露

袋綴1冊 縦26×横18.6cm 文庫30 A51

江戸後期写。左肩題簽に、「山路の露」。

『山路の露』は、後代に別作者によって作られた『源氏物語』の補作であり、宇治十帖後の物語を描く。その伝本は、第一類（刊本系）と第二類（写本系）に分けられる。当該写本は、第一類に当たり、朱筆で、句読点・合点が付される。注目されるのは、本文と同筆で多数の注が書き入れられていることである。朱筆の行間注は、刊本「絵入源氏物語」（展示品25）付録の「山路の露」を踏襲したものが多いが、墨筆の頭注は、年立てや引き歌、語句の説明など、かなり詳細で、独自のものである。

また、本文の末尾に「巻の名は詞に山路の露けきとあり歌にもおもひやれ山路の露にそぼちきて又分かへるあかつきの袖 露ふかき山路をわけぬ人だにも秋はならひの袖ぞしほるる」と、

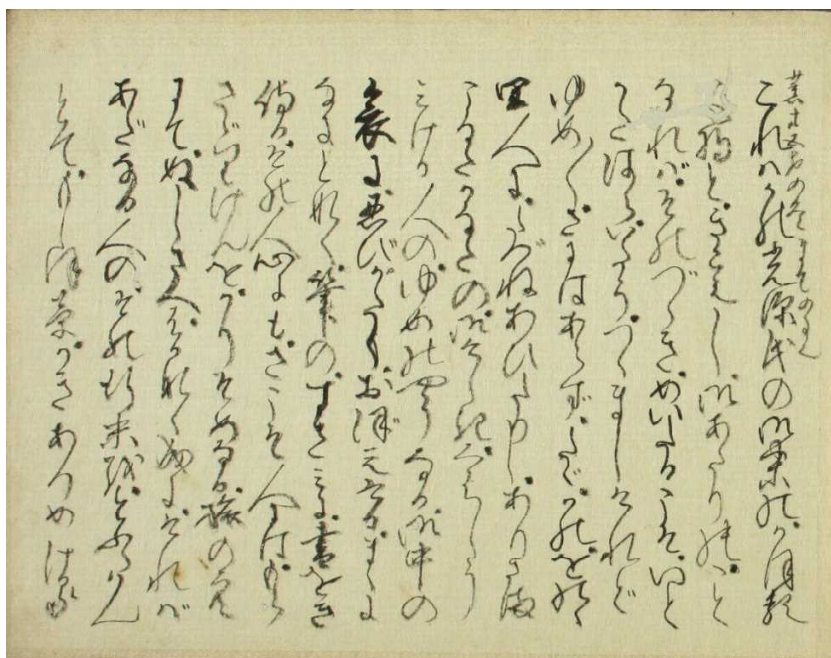


卷名の由来についての考察が記されている。

3 1 山路露

袋綴 1冊 縦 14.3
×横 19.7 cm 文庫
30 A52

寛政4年(1792)瑞雲院写。横本。題箋なく、外題は左肩に「山路露」と直書。右肩に貼紙。奥書に「寛政四壬子歳正月瑞雲院六十一歳而書写之者也」とある。当該写本の本文は、展示品30と同様、第一類(刊本系)に当たり、傍注の一致から、刊本「絵入源氏物語」(展示品25)



付録の「山路の露」の写しと知られる。ただし、当該本では漢字を当てる注記など、刊本にあるいくつかの注記は省略されて書写されている。

4.梗概化・翻訳された『源氏物語』

『源氏物語』は、和歌や連歌作成のための必読書となっていたこともあり、和歌や連歌作成用の梗概書が、連歌師を中心に、比較的早い段階から作成された。近世に入ってから、松永貞徳門下の野々口立圃、山本春正、北村季吟などが、『源氏物語』関係の書を刊行しており、注目される。

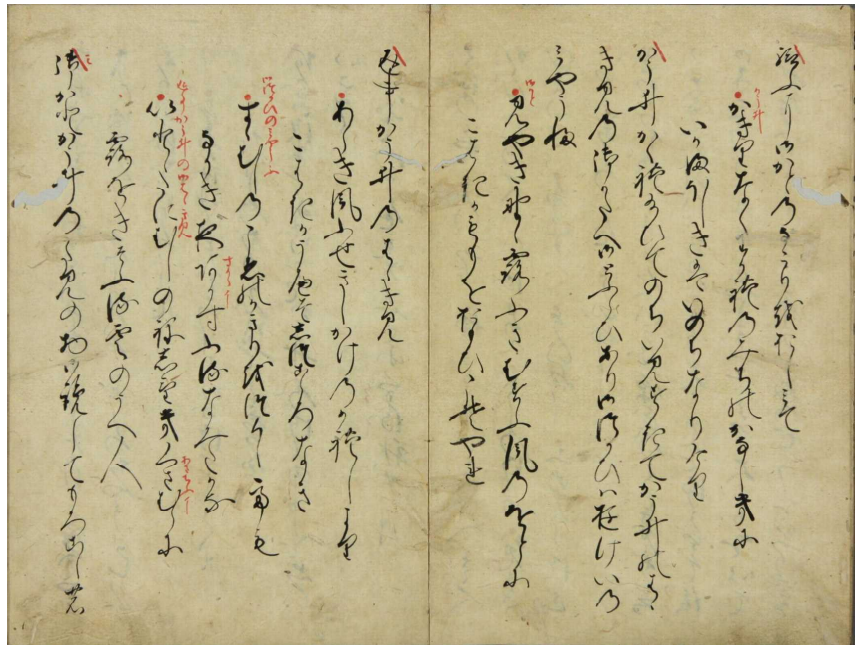
本文、梗概書などが出そろった 18 世紀初頭より、絵を伴った俗語訳の刊行が始まる。『源氏物語』が、歌舞伎などの当時の流行を取り入れつつ、装いも新たに、庶民の文化となっていく一端が見てとれよう。

3 2 源氏一部抜書

列帖装 5 冊 縦 24.8 × 横 16.4 cm 文庫 30 A42

室町中期写。猪苗代兼載(1452-1510)著。古筆了音の極札(宝永 4 年)「猪苗代法橋兼載 源氏抜書全部五冊」および古筆了仲の代付「源氏抜書五冊／一兼載法師／金子五枚」が付される。極札通りであれば、自筆本。内題は「源氏一部并次第」。書名にあるように、『源氏物語』54 帖から和歌を抜き書きし、梗概を添えたものである。第五冊巻末に「連歌のためなれはとほころく つしく をとり侍りされはふしん おほかるへし く / 源氏一部抜書」とあり、連歌師である著者が連歌を作る際の参考として作成したことが知られる。

なお、尾題「源氏一部抜書」の次の一行は削られた跡が残る。各巻の初めには、物語中から連歌の寄合の参考となる語句が引用されている。本書には『源氏物語』の総和歌数七九五首より四十一首少ない七五四首が収録されている。展示箇所は、桐壺更衣の和歌「かきりなくわかれのみち

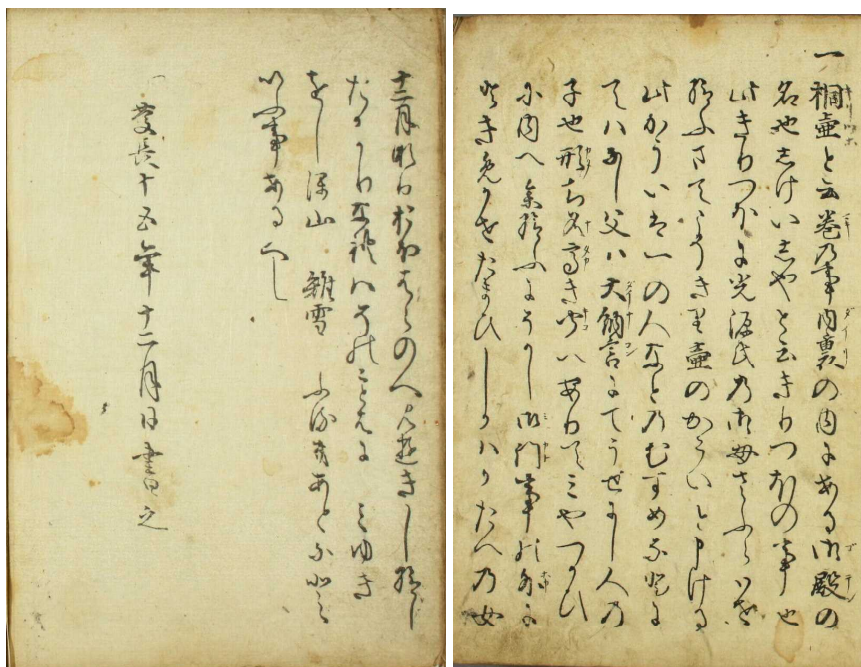


の～」と通行の本文とは異なる点、注意される。(参考：中野幸一氏「猪苗代兼載『源氏一部抜書』の資料的価値」『源氏物語古注釈の世界』汲古書院)

3 3 古活字版源氏小鏡

縦 26.2 × 横 18.5 cm 文庫 30 A23 慶長 15 年 (1610) 頃刊。上下二卷二冊。慶長古活字版。

『源氏小鏡』は数ある『源氏物語』梗概書の中でも最も広く流布した梗概書である。南北朝に成立したが、『源氏物語』の手軽な梗概書として広く愛読され、中世から近世にかけて流布したため、『源氏小鏡』の写

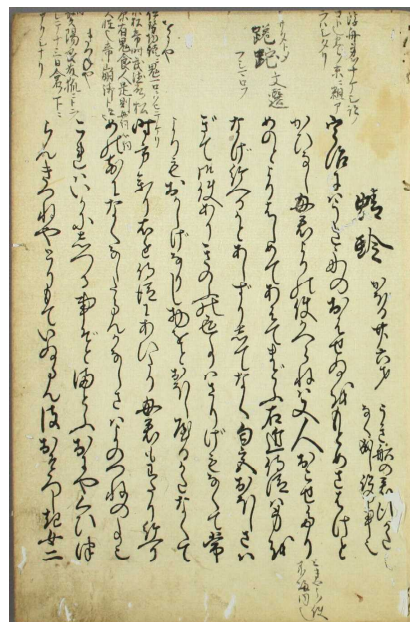
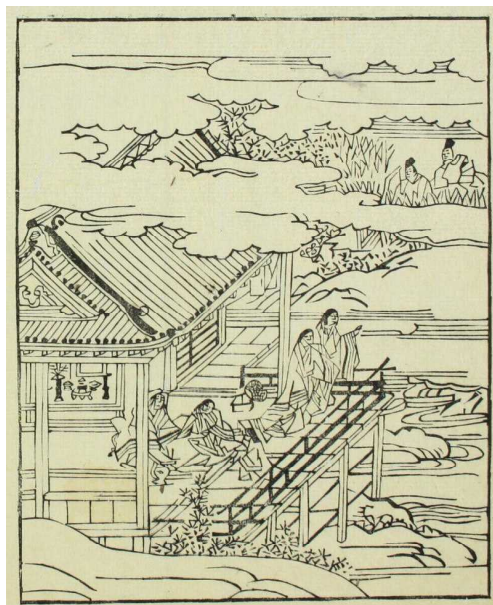


本・版本の数は非常に多い。本書は通称「嵯峨本」。上巻の末尾に「慶長十五年十二月日書之」とある。二冊目末尾は墨消で不読。慶長古活字版の『源氏小鏡』の伝本は少なく、本書のような上下二冊揃いは稀少である。

3 4 十帖源氏

袋綴 10 冊 縦 27.6 × 横 19 cm 文庫 30 A213

承応 3 年 (1654) 頃の成立。野々口立圃 (1595-1669) 著。絵入りの『源氏物語』の梗概書である。全 10 巻あることから、「十帖源氏」と命名される。婦

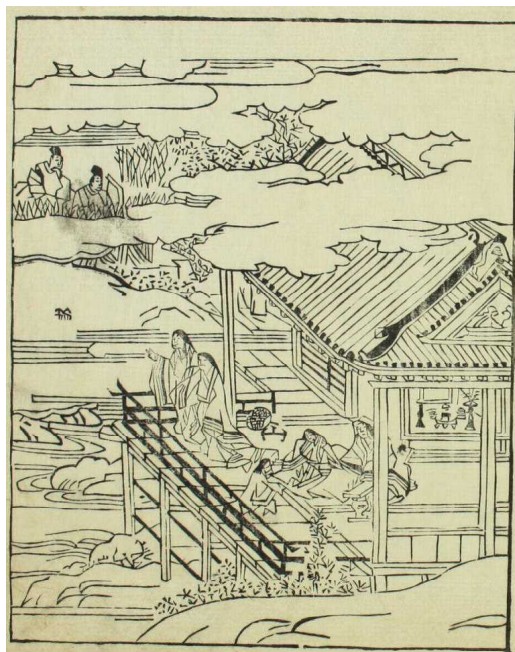


女子向きの俗訳した絵入本として、131 図の挿絵を添えてあり、親しみやすいものとなっている。本文の巻末には六条院・二条院の図、登場人物系図を付している。物語中の和歌もほぼ掲載している。初版は承応 3 年（1654）頃の成立と推測され、無跋無刊記本で、立圃の自筆奥書が加えられ出版された。万治 4 年（1661）荒木利兵衛版は再版、万治 4 年立圃署名本はさらに後刷りである。なお、宇治十帖中・下（巻 9・10）は「九曜文庫」の印しかない。この 2 冊のみ頭注など多くの書き入れ注を有する。さらに頭注が切れており、化粧裁ちされたこともわかる。一面における文字の位置も異なることから、取り合わせ本と考えられる。

3 5 上方版おさな源氏

袋綴 5 冊 縦 27.9 × 横 19.3 cm 文庫 30 A214

寛文元年（1661）刊。野々口立圃著。『十帖源氏』をさらに簡略した梗概書である。巻頭の序によれば、幼少婦女子のために要約し、「おさな源氏」と命名したようである。各冊冒頭に登場人物の系図を載せ、和歌もほぼ全部掲載している。二冊目冒頭の六条院の図は『十帖源氏』巻末からの転用であり、挿絵全 122 図のうち、左右を逆にした 43 図を入れて 113 図の構図をそのまま利用する。同版に、寛文元年（1661）立圃自署名本、寛文 10 年（1670）山本義兵衛版、八尾勘兵衛版、天明 8 年（1788）版『源氏物語大概抄』等がある。



36 江戸版おさな源氏

袋綴 10冊 縦 27.1 × 横 19 cm 文庫 30 A216

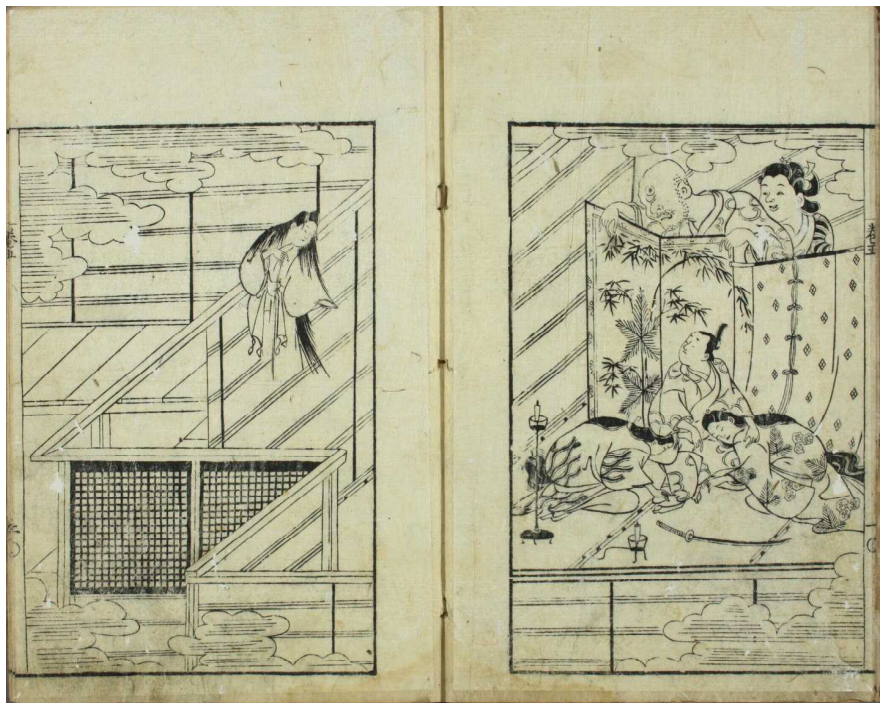
寛文 12 年(1672)刊。野々口立圃著。江戸版は立圃没後に版行された異版で、10 卷 10 冊である。以後延宝 9 年(1681)、天和 2 年(1682)と版を重ねた。挿絵は上方版と比べたら、半分ほどの 64 図になっているものの、菱川師宣(?-1694)が挿絵を描くことでも注目される。上方版おさな源氏の構図を踏襲するが、比較すると、専門の絵師にふさわしく、すっきりと整理されていることが多い。



37 若草源氏物語

袋綴 6冊 縦 25.5 × 横 17.4 cm 文庫 30 A222

宝永 4 年(1707)刊。6 卷 6 冊。水月堂梅翁著。奥村政信画。水月堂梅翁は奥村政信(1686-1764)。『源氏物語』帚木巻から夕顔巻までの絵入り俗語訳。都の錦の『風流源氏物語』(1703)が雨夜の品定めで中絶したのを受けた体裁を取る。本文の前に「襖障子は恋路の関」(巻一)のように題が付さ



れている。本書の挿絵は第1冊に4図（うち見開き1図）、第2冊以降それぞれ5図（うち見開きが1図ずつ）、全29図ある。第6冊末尾に「大和絵師 奥村親妙政信 図」とある。浮世絵にさまざまな工夫をもたらした奥村政信らしく、挿絵の人物の動きには躍動感があり、生き生きとした表情をしている。展示箇所は、夕顔巻の某院。絵入源氏物語の構図を踏襲しつつ、工夫を凝らす。

38 俗解・若草・雛鶴・紅白源氏物語

袋綴 17冊 縦 23.1 × 横 16 cm 文庫 30 A219

享保 11年(1726)刊。俗解6巻5冊、若草6巻4冊、雛鶴6巻5冊、紅白4巻3冊、全22巻17冊。水月堂梅翁著。奥村政信画。『源氏物語』の絵入り俗語訳。奥村政信の俗語訳は、『若草原氏物語』(1707)が帚木末尾の空蟬との邂逅から空蟬、夕顔まで、『雛鶴源氏物語』(1708)が若紫・末摘花、『紅白源氏物語』(1709)



が紅葉賀・花の宴。さらに初巻に戻って作成された『俗解源氏物語』(1710)が桐壺・帚木の雨夜の品定めまでと作成される。後にそれをまとめて享保11年(1726)に刊行したもの。挿絵は『俗解』26図（うち見開き6図）、『若草』29図（うち見開き6図）、『雛鶴』25図（うち見開き7図）、『紅白』21図（うち見開き6図）、計101図。絵入源氏物語などの構図を踏襲しつつ、躍動感溢れる絵となっている。

39 紫文蠶之囀

袋綴 5冊 縦 26.7 × 横 18.4 cm 文庫 30 A212

享保 8年(1723)刊。多賀半七著。『源氏物語』の絵入り俗語訳。桐壺巻から空蟬巻までを所収しており、語句の解説に頭注を付記し、物語内の和歌に解説を付する。本書の挿絵は「摘趣」に見開き1図、桐壺・帚木本・帚木末それぞれ5図（うち見開き1図）、空蟬3図の計19図。『紫文蠶之囀』を作成した多賀半七は刊記に「甲陽府中仕官」とあり、柳沢吉保・吉里親子の臣であることが判明している。「此次

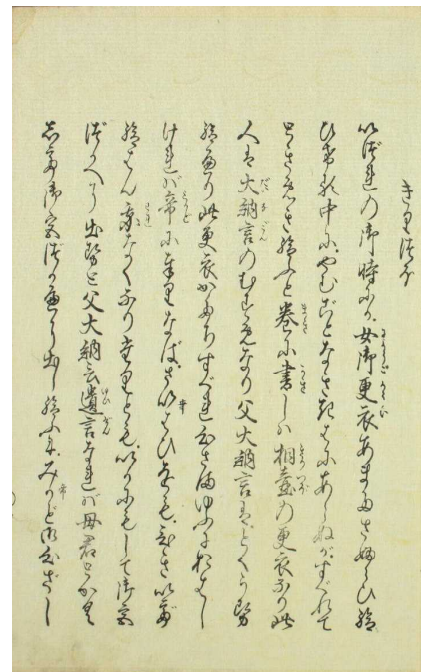
ニ夕かほ若むらさ
 き全部四冊追而板
 行」とあるが、夕
 顔以降は刊行され
 なかったようであ
 る。なお、桐壺～
 宿木までの草稿が
 静嘉堂文庫に存在
 する。挿絵の多く
 は絵入源氏物語な
 どの構図を踏襲す
 るが、展示箇所（
 空蟬と軒端の萩）
 のように、当世風
 の女性たちが多く
 描かれることに注
 意される。



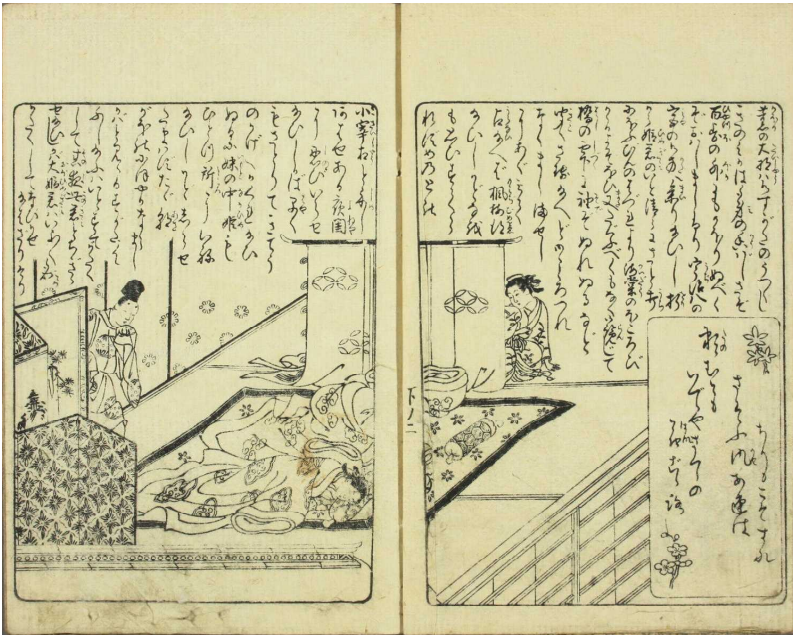
40 源氏物語忍草

袋綴 5冊 縦 25.7 × 横 18.1 cm 文庫 30 A162

天保5年(1834)序。北村湖春著とされる。北村湖春(1648-97)は、『湖月抄』など数多くの古典注釈で有名な北村季吟(1624-1705)の長子。内題は『源氏忍草』。『源氏物語』の梗概書。写本と版本がある。本書には天保5年6月幕府の儒官成島司直(1778-1862)による序文が付されており、北村湖春が執筆してから100年以上後に版本として刊行されたことになる。成島の序には初学者のために『湖月抄』よりさらに大意を理解しやすくしたとあり、跋文には『源氏小鏡』や『十帖源氏』よりも平易な梗概書を試みたとある。54帖全ての梗概を所収し、各巻の冒頭に目次を置く。



4 1 絵本源氏物語



袋綴 3冊 縦 23 × 横 16 cm 文庫 30 A231
 明和 10 年 (1773) 刊。
 醉雅亭隴月著。寺井雪蕉斎画。醉雅亭隴月は、本書を刊行した書肆の吉文字屋市兵衛 (1721-93)。寺井雪蕉斎は、狩野派の絵を学び、西川祐信門下かとされる寺井重房 (生没年未詳)。寛延 4 年 (1751) の刊記を有する版があるので、そのころ成立か。挿絵つきの梗概書。『源氏物語』54 帖のうち 12 の場面から構

成され、場面説明とその場面を詠んだと思われる和歌一首、挿し絵からなる上・中・下巻である。挿し絵の部分は人物を中心に場面が取り上げられており、女性たちは当世風に描かれる。展示箇所は、総角巻で、薫が忍び込み、大君が逃れる場面。空蟬巻と見紛うような構図である。

5.描かれた『源氏物語』

物語の享受は、絵と切り離すことはできない。『源氏物語』にすでに「(中の君は) 絵など取り出でさせて、右近(女房)に詞ことば読ませて見たほまふに、(浮舟は) 向ひてももの恥ぢもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる灯影、さらにここと見ゆるところなく、こまかにをかしげなり。」(東屋巻)と描かれるように、姫君が絵を見、女房が物語を読むという享受形態が見られる。『源氏物語』も早い段階から絵で描かれていたと推測されるが、室町期になると多くの大名たちが源氏絵を欲するようになる。室町以降の土佐派、室町中期から力を得た狩野派、土佐派の流れを汲む住吉派など、さまざまな流派によって源氏絵が描かれる。また、このセクションでは展示しないが、近世に入ると版本の挿絵も多く描かれるようになり、『源氏物語』の享受層を拡げていく。それらの絵の構図は、すべてのデザインと同様、パターン化とパターンからの逸脱を繰り返しており、どのように構図が継承され、逸脱されているかを見ることによって、さまざまな事象が明らかになろう。

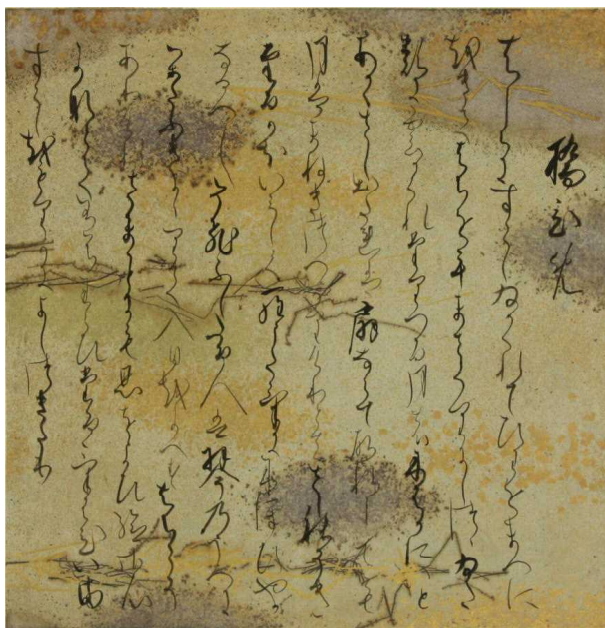
4 2 狩野氏信、秀信画・源氏物語画帖

折帖 1 帖 縦 28.5 × 横 27.7 cm 文庫 30 B377

江戸前期写。狩野氏信、秀信画。詞書の筆者は不明だが、絵は落款印章から江戸初期の画家、狩野氏信(1616?-69)と息子の秀信(1647?-1712)の作と分かる。54帖の前後に、石山寺の紫式部と、石山寺の源氏供養かと思われる場面が描かれている。石山寺2葉は秀信、54帖末尾の夢の浮橋は氏信の落款印章が添えられることから、氏信が54帖を描き、秀信がその前後1葉を描いたか。氏信は徳川家光・家綱に仕えた幕府の御用絵師で大学



と号す。氏信の源氏絵にはほかに「源氏物語図屏風」（個人蔵、六曲一双）がある。秀信は柳雪と号し、画法を父に学んだ。代表作として「源氏物語絵巻」（大英博物館蔵）がある。秀信は、狩野安信や常信が率いるポスト探幽世代の江戸狩野派に属するという。この源氏絵は、広い余白に柔らかな筆致、濃彩よりも淡彩を多く使うなど抒情的な世界を生み出し、探幽が目指した新しいやまと絵の様式で表現されている。54帖の各巻の印象的な場面をひとつずつ選択し、装束の文様と色遣い、調度類に至るまで精緻に描く。展示箇所は橋姫巻。典型的な構図である。



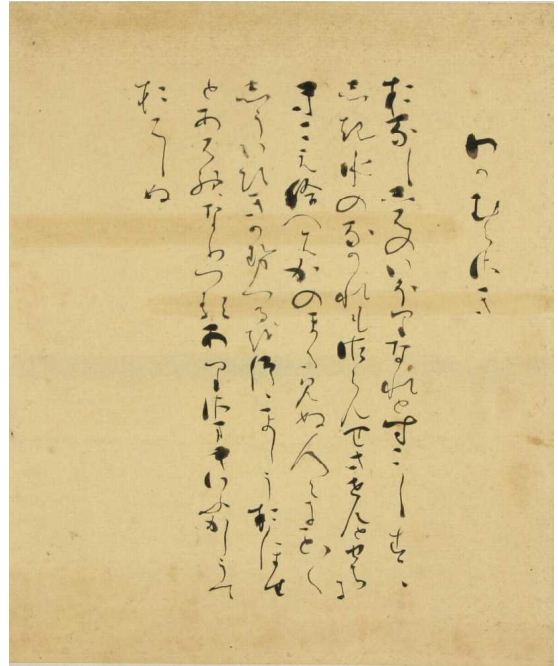
4 3 伝土佐光成画・源氏物語絵巻：若菜下

卷子1巻 縦27.4×横471cm 文庫30 B422

江戸前期写。若菜下の女楽を描く絹地の絵巻。表紙は金色の布地に雲の文様、見返しには切箔や野毛が散らされ、また絹地の裏には雲母紙が貼られており、美しい作品に仕上がっている。詞書を烏丸光雄(1647-90)、絵を土佐光成(1646-1710)に極めた昭和18年の古筆了信の折紙が添えられる。箱書も詞書を烏丸光雄、絵を土佐光成とする。室内上の右から、脇息に寄りかかる明石の女御、琴の琴の女三宮、外に目をやる光源氏、その手前には琵琶の明石の君、室内右下には和琴の紫の上が描かれている。また、御簾の外では夕霧が箏の調子を合わせ、玉鬘の長男と夕霧の長男がそれぞれ笙・横笛で拍子を合わせている。



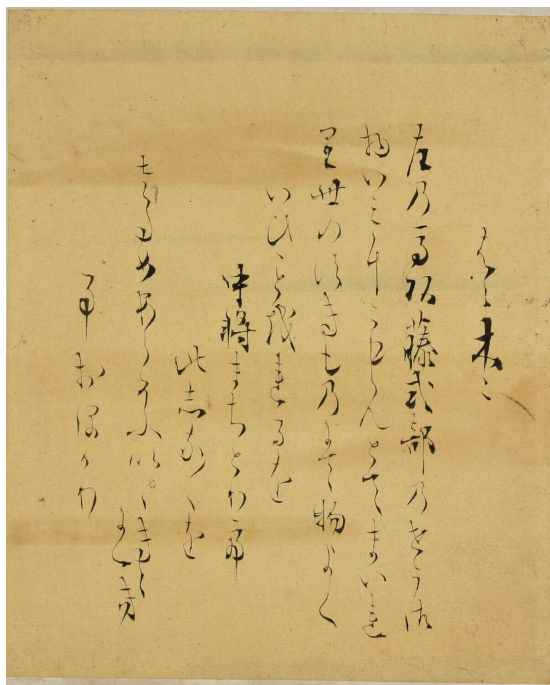
4 4 源氏物語画帖



折帖 1 帖 縦 25.3 × 横 21.1 cm 文庫 30 B425

江戸前期写か。甫正画・品田入山ほか筆との伝承を有する。外箱の札に「白描 古土佐画帖 源氏物語」、外箱側面に貼紙「白描 古土佐 源氏物語画帖」とあり、土佐派の源氏絵との伝承を有する。絵師の甫正は未詳だが、土佐光起（1617-91。光則の子）の門人の正甫（江戸時代前期～中期の画家。元禄年中に活躍）の誤伝か。金雲に柔和な墨線、モノトーンで細密に描くこの源氏絵は、パーク・コレクションやフリア美術館蔵の土佐光則（1583-1638）の白描源氏物語画帖を連想させる。特徴的な場面選択としては、例えば、帯木巻では定型化された「雨夜の品定め」の男四人の談議ではなく、左馬頭と藤式部丞が渡殿を通して光源氏と頭中将のいる部屋を訪ねようとしている品定め直前の場面を描く。帯木巻でこの場面を選んだ絵は光則本以前にはないと指摘されており、この画帖の人物配置等は、徳川美術館蔵の光則筆『源氏物語画帖』に近似する。また、若紫巻では、垣間見を終えた光源氏が僧都の坊を訪れて若紫の素性を聞く場面を描くが、これと同じ場面を選択した絵として、フリア美術館蔵の光則筆『白描源氏物語画帖』がある。このように、本画帖は選択場面にもまた光則の影響が考えられるとともに、定型からの逸脱がうかがえる。本画帖の制作年代は光則の活躍した時代よりは下がると思われるが、光則の様式を受け継ぐ工房の意欲的な絵師によりされたものか。画帖は 54 帖みな揃っており、詞書は寄合書だが、定家様が多く見られる。（参考：秋山虔 田口栄一監修『源氏物語一豪華「源氏絵」の世界』学習研究社、一九九九年。河田昌之「伝土佐光則筆「白

描源氏物語色紙貼付屏風」(東京国立博物館蔵)について『源氏絵集成【研究篇】』
藝華書院、二〇一一年)



4 5 狩野祐清画・四季源氏

卷子 2 卷 縦 30.5 cm 文庫 30
B423

江戸後期写。末尾に「祐清法眼筆」との落款があり、狩野邦信(号・祐清)(1788-1840)画、法眼に叙せられた天保2年(1831)以降の作と知られる。狩野邦信は四家で構成される狩野派の宗家のひとつ、中橋狩野家の泰信の養子となり、養父の跡を継いで同家当主となる。江戸幕府御用絵師のうち最も格式の高い職位である奥絵師として仕え、活躍した。この絵巻は四季折々の美しい自然を物語の情景に溶け込ませながら、主に各巻を代表す



る名場面を鮮やかな彩色と精緻な筆致で描いている。展示の上巻には桐壺巻～賢木巻のうち九つの場面、下巻には花散里巻～朝顔巻のうち八つの場面が選び取られている。

4 6 源氏物語絵巻断簡：須磨

1 葉 断簡縦 16 × 横 41.3 cm 文庫 30 B417



室町末期写。墨のみで描かれた白描絵。人物の顔立ちや空の描写からこの絵は専門の絵師ではなく、素人の手によって描かれた素朴な雰囲気漂う。室町以降は、このような白描の源氏物語絵巻が多く作られていた。詞には和歌とその前後の文章を書く定番の形である。須磨に赴く前、光源氏は離京の挨拶を告げるために月の光がしめやかに射し込む中、花散里を訪ねる。この絵は、二人があかつき近くまで語り明かした後、別れを惜しんで唱和するところを描いている。花散里と光源氏の歌とともに詠み込まれた「月影」の語は光源氏を指し、光源氏の「光」が月の光でもあることを示しており、象徴的な名場面を選択していると言えようか。

4 7 源氏物語絵巻断簡：野分

1 葉 断簡縦 14.2 × 横 44.8 cm 文庫 30 B427

室町末期写。白描絵巻の断簡を掛け軸にした作品。外箱には「中宮法眼誠美誌」と



ある。小型の白描絵巻は室町時代に流行した。詞書は、野分巻の冒頭、秋好中宮の庭の様子から夕霧が紫の上を垣間見る場面まで書かれているが、本文の脱落が目立つ。絵は、妻戸から夕霧に垣間見られる紫の上か。この場面の絵では、風で吹き上げられる御簾を押さえる女房らが描かれることが多いが、本作品では女房らも紫の上と共に座る。

4 8 古代模様紫式部



3枚続 縦 37.5 × 横 75.3 cm 文庫 30 B309

明治 29 年 (1896) 刊。小林清親画。作者は明治浮世絵界の三傑の一人で、最後の浮世絵師、明治の広重と呼ばれる小林清親 (1847-1915)。広重が発展させた風景版画の世界に、西洋画の構図と光と影を意識した「光線画」と称される新手法で人気を博し、浮世絵界に新風を巻き起こした。風景画のほかにも、幕末から明治に流行したユーモアあふれる風刺画「ポンチ絵」、歴史画や美人画など、多岐に渡るジャンルを手掛けた。この絵は、画面いっぱいに紫式部の姿を描いており、右端には百人一首にある紫式部の歌「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな」が書かれている。

6. ずらされていく『源氏物語』

『源氏物語』は、注釈、絵画、梗概、俗語訳など、さまざまな入れ物に入れられ、『源氏物語』そのものからずらされていくが、さらに大きな入れ物／文化装置として登場したのが柳亭種彦作、歌川国貞画『修紫田舎源氏』である。『修紫田舎源氏』は、『絵入源氏物語』の影響を受けた奥村政信の『若草原氏物語』の挿絵を5編上扉絵に使用するなど、これまでの『源氏物語』関連書や挿絵を飲み込み、ファッション誌などの文化装置の役割も果たしつつ、大きな流行現象を巻き起こした。それは、

「『源氏物語』は逆に『田舎源氏』を通じて輪郭を与えられていた時期があったとさえいえる」（マイケル・エメリック氏）状態であった。その流行に『修紫田舎源氏』の類作や『修紫田舎源氏』由来の源氏絵が追随し、『修紫田舎源氏』を軸に『源氏物語』はずらされ、さらに、発情装置としての艶本も、作者自ら、あるいはその周辺によって作成されていく。（参考：マイケル・エメリック氏「『修紫田舎源氏』をどう読むか」講座源氏物語研究第5巻『江戸時代の源氏物語』おうふう）



49 修紫田舎源氏

袋綴 38冊（合 76冊） 縦 17.5 × 横 12 cm へ 13 4274
 文政 12 年 - 天保 13 年 (1829-42) 刊。
 柳亭種彦 (1783-1842) 著、
 歌川国貞 (1786-1864) 画による合本の雄編。
 天保十三年 (1842) 水野忠邦の改革に遭い絶版、未完である。『源氏物語』の枠組みに舞台を室町時代にうつし歌舞伎や浄瑠璃の



演出を混交して将軍位をめぐる争いを描く。初編は刊行後火災で版木を焼失し再刻本が製作されたが、当該本は「文政十二年己丑正月」の序刊記を有する初版本。再刻本の序は「十三年庚寅二月再板」と併記、古浄瑠璃を真似た文体にふさわしく細身の書体になる。4編・8編ほか断片的に下絵入りの草稿が残存し、種彦が見返しや口絵・挿絵の絵組まで作成指示し趣向を凝らした。（参考：鈴木重三校注『修紫田舎源氏』上・下 岩波書店）挿絵の構成力と作品の人気には「その画精妙、本文に勝れり…世評噪しきままでに行はる」と馬琴も対抗心を燃やしていた（『近世物之本江戸作者部類』）。

参考出品：修紫田舎源氏（再刻本）へ13 3013

参考出品：修紫田舎源氏 4編草稿 ほるぷ出版, 1983.4

50 其由縁鄙倂

袋綴 46冊 縦 17.8
×横 11.8 cm 文庫
30 A260

弘化4年-慶応2年

(1847-66) 刊。題名

の「由縁」（紫）、

「鄙」（田舎）に

現れているように、

『偽紫田舎源氏』

の続編が意図されて

いる作品である。

柳亭種彦の遺稿が

用いられている上、

一筆庵主人（溪斎

英泉（1790-1848）、

柳下亭種員（1807-

58）、笠亭仙果（1804-

68）あるいは代作

者など複数の人物

が作者として関わり、

版元も度々変わって

いった。絵も一陽斎

豊国（歌川国貞（初世）

1786-1864）、梅蝶楼

国貞（歌川国貞（二世）

1823-80）、錦朝楼

芳虎（歌川芳虎（生没年

未詳））と変わる。第4編は、

初版は作者（一筆庵主人）の

病気により簡素な表紙で

刊行され、後摺本から錦絵表紙が

付けられたとされる。



が作者として関わり、版元も度々変わっていった。絵も一陽斎豊国（歌川国貞（初世）1786-1864）、梅蝶楼国貞（歌川国貞（二世）1823-80）、錦朝楼芳虎（歌川芳虎（生没年未詳））と変わる。第4編は、初版は作者（一筆庵主人）の病気により簡素な表紙で刊行され、後摺本から錦絵表紙が付けられたとされる。

5 1 足利絹手染紫

袋綴 26 冊 縦 17.8
×横 11.9 cm 文庫
30 A259

嘉永 3 年-文久元年
(1850-61) 刊。笠
亭仙果・松亭金水
(1795(97 とも)-
1862) 著。歌川国貞
(初世)・歌川国
貞(二世)画。『偽
紫田舎源氏』の続
編が意図された作
品の一つである。
本来は第 21 編まで
あるが、当該書は
第 19 編以降欠本で
ある。始まりが第 6
編からの変則的な



形態であるのは、『其由縁鄙俳』の第 5 編の刊行の後に本書が刊行されたからである。本書と『其由縁鄙俳』は競合関係にあり、互いに非難をし合い、主導権を争っていた。本書作者である笠亭仙果は、後に『其由縁鄙俳』の作者となっている。

5 2 室町源氏胡蝶卷

袋綴 34 冊 縦 17.8
×横 11.7 cm 文庫
30 A347

文久 4 年-明治 3 年
(1864-70) 刊。柳
亭種彦(笠亭仙果)著、
梅蝶楼国貞(歌川国
貞(二世))画。『偽
紫田舎源氏』の類作
の一つであり、同じく
類作の『足利絹手染
紫』や『其由縁鄙俳』
に関わった笠亭仙果
(柳亭種彦二世)に
よる作品である。刊
行は文久 4 年(1864)



に始まり、明治にも続いた。本来は初編から第 26 編まで存在するが、当該書は欠本がある。また、第 3 編上が二種類含まれているが、表紙の色遣いの違い・見開き口絵の有無（二丁分）・裏見返しの 3 つ目の広告の違い等が見え、刷りが異なるものであることが分かる。

5 3 薄紫宇治曙

袋綴 8 冊(合 16 冊) 縦 17.7 × 横 11.8 cm 文庫 30 A264

嘉永 3 年-安政 3 年(1850-56)刊。柳下亭種員著、香蝶楼豊国(歌川国貞(初世))画。『修紫田舎源氏』の類作の一つで、宇治十帖の翻案作品である。類作である『其由縁鄙俳』に関わった柳下亭種員が初編から 6 篇までを書き、同じく複数



の類作に関わる笠亭仙果が 7 篇・8 篇を書く。絵も、歌川国貞(初世)が初編から 5 編までを描き、歌川国貞(二世)が 6 編以降を描く。八宮は足利左馬介義邦、大君は総角姫、中の君は千里姫、薫は足利薫之助光将、匂宮は足利兵部丞氏郷となっている。なお、当該書 3 編下は上と合綴した際、のどの部分を外側にして綴じてしまっている。

5 4 根源実紫

袋綴 8冊(合 30冊) 縦
17.9 × 横 11.9 cm 文庫
30 A263

安政 4年-文久 2年(1857
-62)刊。笠亭仙果著、一
陽斎豊国(歌川国貞(初
世))画。絵は 3編以降
歌川国貞(二世)。全 17
編だが、当該書は 15編
まで計 30冊を 8冊に合
冊している。各編の表紙
および一部の表見返しが
色刷り。初編の序文には、
『源氏物語』の作者である
紫式部について知りたい
という要望に応え、彼女
の生涯を記すことにし
たと書かれている。絵を
中心に据えながら、周りに
説明を付す。各編の序文
で笠亭仙果自らが繰り返
し記すとおり、虚実ない
交ぜの記述で、紫式部が
『源氏物語』を記すに
至るまでを、親族の記述
や紫式部の詠歌を取り
入れつつ記している。



5 5 源氏後集余情：空蝉

2枚続 縦 36.2 × 横 49.5 cm 文庫 30 B4

安政 5年(1858)刊。豊
国(歌川国貞(初世))
画。「五十四帖」を「後
集余情」と据えなおし、
『源氏物語』各巻のタ
イトルを冠した一連の
錦絵のうち一枚。鏡を
見る女性(空蝉/空衣)
と香壺を持つ少年
(小君/君吉)が描かれ、
着物の色柄はたいへん
華やかである。「源氏」
の名を冠してはいるも
の、『修紫田舎源氏』
3編表紙をそのまま流
用しており、『修



紫田舎源氏』由来の源氏絵である。

[参考パネル：修紫田舎源氏 3](#)
[編表紙](#) へ 13 4274



5 6 吾妻源氏若菜之卷

3 枚続 縦 36.2 × 横 76.3 cm 文庫 30 B60

安政元年（1854）刊。『修紫田舎源氏』の挿絵を描いた豊国（歌川国貞（初世））によるもので、『源氏物語』若菜上で、柏木が女三宮を一瞥した場面を『修紫田舎源氏』風に描く。画面中央奥の簀子で、子供の鞠つきを見ている海老茶筌髻の人物が光源氏。桜の木の下で扇を広げているのが夕霧で、猫が御簾を動かしたのを流し目で見る画面左端の人物が柏木か。猫をつないだ紐を手にして、御簾から顔をのぞかせている女性は大納言。本作は、『源氏物語』若菜上での、蹴鞠に興じる公達たちを、鞠をつく子供として描くといった改変がなされている。



5 7 合筆源氏庭中之雪

3枚続 縦 36.8 × 横 75.1 cm 文庫 30 B111

安政 6 年（1859）刊。豊国（歌川国貞（初世））と広重（二世 1826-69）の合作。両



者の他の合作作品としては「源氏合筆四季」などが挙げられる。海老茶筥で知られるように『修紫田舎源氏』由来の源氏絵。『源氏物語』朝顔巻（『修紫田舎源氏』30編）で、光源氏が童女たちに「雪まろばし」をさせた際に、今は亡き藤壺が雪山を作らせたことを回想する場面があるが、その回想を絵画化したものか。画面右に描かれる男女二人は、光源氏と紫の上。画面中央に立つ女性が藤壺か。女性たちが雪を積み上げて作った雪山が富士山の形になっている。また池の中には当巻の源氏の歌にも詠み込まれる鴛鴦が描かれており、本文を丹念に詠み込んだ構図となっている。

5 8 今源氏錦絵合

折帖 1帖 25.3 × 17.5cm 文庫 30 B1

江戸末期刊。一陽斎豊国（歌川国貞（初世））画。笠亭仙果跋。嘉永 5・嘉永 6・安政 1 年（1852-54）の 3 年に彫られた錦絵をまとめて笠亭仙果の跋を付し、折帖にしたもの。『修紫田舎源氏』の人気により、歌川国貞（初世）の『田舎源氏』挿絵に基づく源氏絵が制作されるようになったが、本作もそのなかに位置づけられる。一陽斎豊国は、豊国襲名後の国貞（初世）のこと。『源氏物語』54 帖を描く本作は、『田舎源氏』やそれを受けた『其由縁鄙俳』・『足利絹手染紫』での自身の挿絵に基づいたものが多いが、『源氏物語』そのものの場面を当世風に描いたものも多い。各絵に添えられている狂歌は、仙果と交友関係にあると思われる各地の狂歌師らに

よるもの。



参考パネル：修紫田舎源氏 4・5 編 へ 13 4274

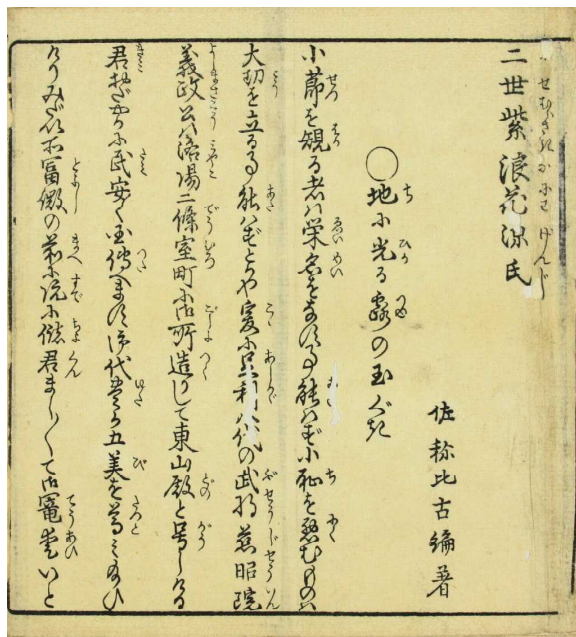


59 似世紫浪華源氏

前編は折本、後編は施風葉、2冊 前編縦 17.2 × 横 8.4 cm 後編縦 18 × 横 8.4 cm 文庫 30 A257

刊年未詳。さねひこ著。さねひこは柳亭種彦。柳亭種彦自身が『修紫田舎源氏』の十四編までを春本にしたもの。主人公光氏と女性たちとの性愛が物語られている。展示品は、前後二冊に分かれ、装丁としては、前編は折本であるのに対し、後編は施風葉である。林美一氏所見本では、二冊ともに歌川国貞（初世）の多色刷絵を有し、また前編には種彦の序文はなく、「大きな鼻の人しるす」と、細川浪二郎（鼻山人 1791(90 とも)-1858)の序文が載る（林美一『秘板源氏絵』）。国際日本文化研究センター所蔵本（前編のみ）は種彦

の序文で、歌川国貞の絵を有する。後編のみ内題に「後編」と誌すことから、当初は種彦の序文のある前編のみで完結していたものが、評判により後編を刊行し、その際に鼻山人の序文を前編に付し、種彦の序文を後編に移したかと思われる。展示品に国貞の口絵は一切なく、前後編ともに種彦による同一序文が収載されている。絵を切り取った上で取り合わせた本であろう。



60 艶色二葉源氏：後編（画像なし）

袋綴 1冊 縦 18 × 横 12.2 cm 文庫 30 A361

弘化3年（1846）序。淫水亭開好著。後編序文に「ひ大きなうまのはつ春」とあり、後編は弘化3年丙午（1846）刊行か。淫水亭開好は柳水亭種清（1821(23 とも)-1907)か。河竹黙阿弥門下で歌舞伎脚本をかき、のちに柳下亭種員に学び、『白縫譚』など多くの合巻をあらわす。また、多くの艶本もあらわす。絵師は柳水亭種清と組み、艶本を描いた歌川国盛（生没年未詳）か。前半に多色刷の春画を置き、後半に「中の巻」と題してテキストが配置される。『修紫田舎源氏』由来の絵で、「源司の君」と、「お空（空蟬／空衣）」「お村（軒端萩／村萩）」など、『修紫田舎源氏』や『源氏物語』の登場人物を想像させる女性たちとの絡みを描く。

61 見たて五行水：うきふね

3枚続 縦 37.3 × 横 75.9 cm 文庫 30 B0245

嘉永頃刊。一勇斎国芳画。「見たて」とは古典文学や故事などの題材を当世風俗で描き出すこと。五行「木火土金水」のうちの「水」を浮舟巻で描く。『修紫田舎源

氏』由来の源氏絵である。薫と匂宮との間で揺れる浮舟を、匂宮が対岸の家へと舟で連れ出す場面。左から浮舟、匂宮、女房の侍従。物語では、匂宮は浮舟を抱き寄せ、「橘の小島」に准えて変わらぬ愛を誓う。一勇斎国芳は、斬新な構図や猫などの動物の絵で有名な歌川国芳(1797-1861)。



7. 『源氏物語』 という文化

『源氏物語』は、さまざまな文化装置として機能するが、『源氏物語』の内容を離れたところでもさまざまに機能する。近世に入り、『源氏物語』やその関連書が隆盛を誇る中、双六、源氏香、カルタ、投扇、あるいは源氏名など、『源氏物語』の物語内容とはほとんど無関係となり、記号的な文化表象として用いられ、広がっていく。

6 2 源氏香図



1 軸 縦 67.8 × 横 49.8 cm 文庫 30 A308

江戸初期写。伝土佐光起画。書名は内容による。題簽「源氏五十四帖の画」箱題「源氏物語之図」。軸裏に「土佐光起筆」、箱書に「伝土佐光起筆」とする。土佐光起は土佐光則の息子。土佐派中興の祖とされる。折帖を掛け軸に仕立て直したものか。それぞれの巻の源氏香の図とともに、その巻を象徴する記号的とも言える景物を描く。源氏香は香道の組香の一種であり、5回縦線を引き、5回の香りを聞いて同じ匂いがするものを横の線で繋ぎ源氏香の図を完成させる遊戯。全52通の組香になるため、『源氏物語』54帖のうち「桐壺」と「夢浮橋」以外の巻名が用いられている。それゆえ「桐壺」と「夢浮橋」の組香の図は無く、趣意絵が他の巻より大きく描かれる。

6 3 五十四帖源氏發句双六

1 枚 縦 45.5 × 横 65.4 cm 文庫 30 B320

刊年未詳。北冥舎魚堂編、松高齋春亭画。『源氏物語』を題材とした双六。中央の上がりのコマには、石山寺の紫式部の絵が配置される。その周囲には「桐壺」から「夢浮橋」まで 54 帖の章段名のマス目が配置されており、各マス目には北冥舎魚堂が集めた各俳人の発句と、源氏香の図が書かれている。北冥舎魚堂は内新好（生没年未詳）。江戸時代後期の戯作者、俳人である。画を担当した松高齋春亭は、勝川春英の門人、勝川春亭（1770-1820）のこと。合巻や読み本などの挿絵、役者絵・風景画などを手掛けた浮世絵師である。裏にはかつての所有者によるものか、明治3年の年記がある。



6 4 江戸紫源氏双六

1枚 縦 39.2 × 横 58.8 cm 文庫 30 A383

江戸末期刊。香蝶楼国貞画。千柳亭一葉、檜園梅明、六朶園二葉の狂歌入。『偽紫田舎源氏』の挿絵を踏まえて作られた、『源氏物語』を主材とした双六。石山寺の紫式部のマス目と『源氏物語』の章段名を含めた、計 15 個のマス目が狂歌と共に書かれる。「振り出し」は「帚木」、「石山」で「上り」となっており、各章段名下に進むマス目が記されている飛双六である。香蝶楼国貞は歌川国貞（初世）。狂歌選者である千柳亭一葉（1788(93 とも)-1864）、檜園梅明（1793-1859）、六朶園二葉（梅檀二葉/?-1858）は、みな江戸末期に活躍した狂歌師である。



6 5 源氏物語五拾四帖之生方図

仮綴 1冊 縦 28.2 × 横 20.1 cm 文庫 30 A305

江戸後期写。梅廼舎一枝著。表紙見返しに「源氏物語五拾四瓶ノ生方由来」として、「享保十三年京都大仏妙法院ノ宮ニ於テ歌会の節」に「当流二代目」の「浄雪浄江ノ両師心付キ源氏物語ニ心ヲコメシ生花ヲ大広間ニ仕レバ御感斜ナラズ」、「是則チ五拾四帖生方ノ始ナリ」と事情を述べる。梅廼舎一枝は、江戸後期の華道家の春草庵一枝（生没年未詳）か。下町



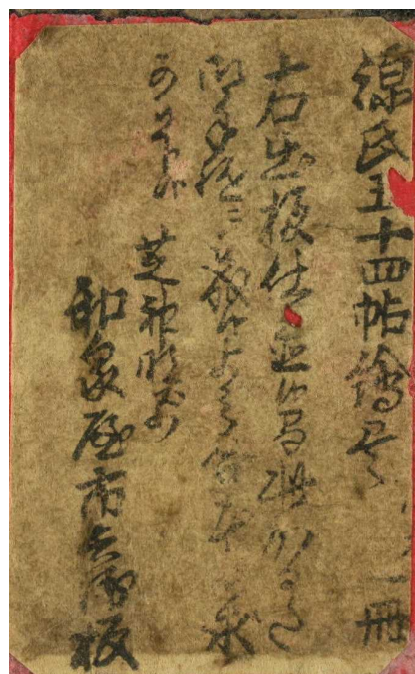
遠州流の祖という。『源氏物語』54帖すべての巻にちなんだ植物を用いた生け花の図が描かれる。それぞれの巻名に関する和歌一首と、植物名が記載されている。乱丁落丁があり、葵・賢木が落丁している。

6 6 源氏かるた

110枚 縦 6 × 横 4.8 cm 文庫 30 A0313



文化9年(1812)頃刊。文化年間に刊行された葛飾北斎の「風流源氏うたかるた」。帙の内側の貼紙に「源氏五十四帖絵尽口一冊 右出版仕置候間此かるた御手遊ニ被成候よみ口本口求可被下候 芝神明前和泉屋市兵衛板」と「源氏五十四帖絵尽」の宣伝が載る。溪斎英泉著「源氏五十四帖絵尽」は同

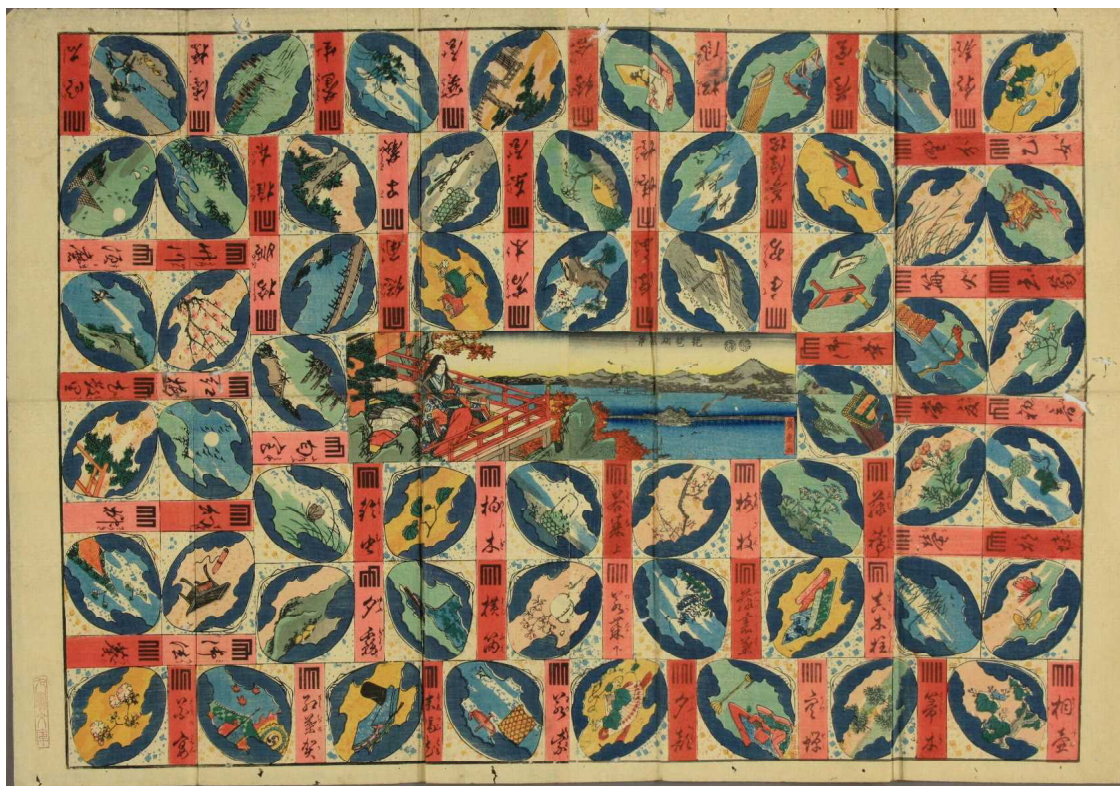


じ和泉屋市兵衛から文化9年に刊行されており、それ以前の作成。各巻ごとに読み札と取り札があり、読み札に巻名とその巻の和歌の上の句、取り札に和歌の下の句が書かれる。両札に印刷されている絵は、源氏香図は読み札が青、取り札が朱となっており、それぞれ巻の趣意を表した景物が描かれる。

67 源氏絵可留多

1枚 縦49.2×横74.3cm 袋縦24.6×15.7cm 文庫30 B326

江戸後期刊。歌川広重画。袋裏に「此仕やうは五十四枚のかるたを人数にならひ何枚づゝにてもわり付くばり置おのおの人にせぬやうにして其うちの札にきりつぼあらば其人より桐つぼの糸の上へ札をおくへし又あとの札にはゝきぎあらば直につきへおくべし」「次へ置札なき時は人の持たる札をよび出すなり右のごとくしてをいをい手の札上ケ切たる人かちなり」とトランプのような遊び方の説明がある点貴重である。



68 なげ扇よしこの源氏

袋綴 1冊 縦 17.5 × 横 11.8 cm 文庫 30 A287

弘化4年(1847)刊。魁春亭貞芳画。魁春亭貞芳は、歌川国貞門下の歌川貞芳(生没年未詳)。「よしこの」は「よしこの節」とも言い、江戸末から明治初年にかけて流行した俗謡。変じて都々逸となったという。序文に源氏物語 54帖をよしこの節にした旨を述べる。内容は、前半が 54帖の巻名を、後半は「五十四帖外編」と題して「あま夜」「若草」などの言葉を、七七七五のよしこの節にし、

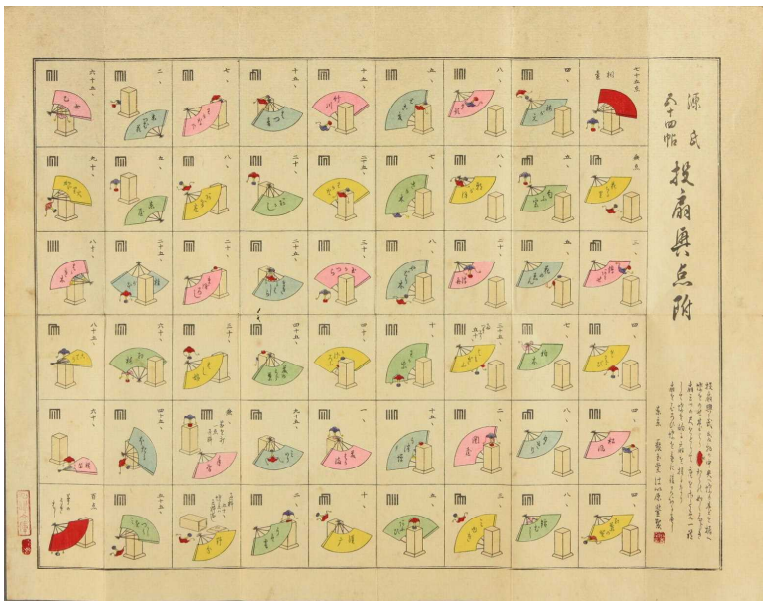


絵を付す。題に入る「なげ扇」は内容と関わりなく、序に「たましいかへす香の図か世にもてはやす扇拳」と触れられるのみ。『源氏物語』文化の一端としての源氏香や投扇興を重ね合わせるか。

69 源氏五十四帖投扇興点式図絵

1枚 縦 37.4 × 横 49.7 cm 文庫 30 A388

刊年未詳(明治以降)。付属資料:蝶の台1箱 蝶1個。投扇興は、投席から的に向かって扇を投げ、扇が落ちた方向や的との位置関係を『源氏物語』の巻々や『百人一首』に見立てて、点数を競う室内遊戯。投扇興の競技の点数判定のために用いられ、一枚の紙に投扇図が展開される。なお、「紫式部石山遊源氏五十四帖：投扇曲点式図絵」(文



庫 30 B336) には「扇角力」の図が見られる。投扇興の古態を示すものかとも考えられ、興味深い。

70 源氏物語うつ蟬の巻

3枚続 縦 37 × 横 74.1 cm 文庫 30 B7

江戸末期刊。極の丸印のみ。天保末年あたりか。『修紫田舎源氏』の挿絵を描いた歌川国貞（初世）によるものだが、『田舎源氏』由来のものではなく、それ以前の源氏絵の伝統に沿ったもの。光源氏が碁を打つ空蟬と軒端萩の様子を垣間見るといふ、「空蟬」巻での有名な場面を描く。画面中央には空蟬の弟である小君と光源氏が描かれる。画面右部分では碁を打っている女性が描かれているが、紫の単襲を着ている人物が空蟬で、それに向かい合っている者が軒端萩。背景には、前巻「帚木」において描写された遣水や前栽といった紀伊守邸の庭園の様子も描かれている。

